「三重大学ベトナムフィールドスタディ 2015」報告書



2015年12月

三重大学ベトナムフィールドスタディ 2015

参加者一同

目次

Ι.	. 概要	4
1.	フィールドスタディの概要	4
	全体日程	
3.	要約	7
4.	ベトナム社会主義共和国 基礎データ	10
Π.	. 事前準備	11
Ш.	. 訪問先別報告·感想	13
1.	ベトナム戦争	
	(1)クチトンネル	
	(2)統一会堂	
	(3)戦争証跡博物館	
2.	文化交流	
	(1)ホーチミン市師範大学との合同フィールドリサーチ	
	(2)ホームステイ	
	(3)日本語スピーチコンテスト・懇親会	
3.		
	(1)JICA 南部連絡所	
4.	貧困問題・初等教育	31
	(1)FFSC(ストリートチルドレン友の会)・ビンチュウ能力開発センター	31
	(2)レ=ゴク=ハン小学校	34
5.	保健医療・障がい者・女性	36
	(1)リンスアンセンター (孤児院)	36
	(2)ツーヅー病院産婦人科・平和村	38
	(3)女性開発センター 有松隊員	40
6.	都市開発・まちづくり・観光	41
	(1)ホーチミン都市鉄道1号線建設プロジェクト	41
	(2)ドンラム村	43
7.	経済・日本企業	45
	(1)エスハイ KAIZEN 吉田スクール	45

	(2)	JETRO ノ	、ノイ事務所	47
	(3)	ベトナム	、日本人材協力センター	48
	(4)	NC ネッ	トワーク講演会・日本人駐在員との懇親会	49
8.	農業	生態系位	保全	51
	(1)	北部中山	」間地域に適応した作物品種改良プロジェクト	51
			国家農業大学生との交流とシニアボランティアとの意見	
	(3)	持続的自	然資源管理プロジェクト	55
T 7	}	い光数		
17.		,,,,,,,		
1.			師範大学連絡	
2.			レンジ	
3.		•	歴史	
4.			<u> </u>	
5.				
	` ′		<i>y</i>	
6.				
	` ′		<i>y</i>	
	` ′			
7.				
	` ′		<i>y</i>	
8.	報告	書とりまり	とめ	60
V.	感	想		61
1	稲葉	歩	(人文学部法律経済学科 3 年)	62
	速水	少 友梨乃	(人文学部法律経済学科 3 年)	
	五藤	以来 乃 咲蓉子	(人文学部法律経済学科 2 年)	
	渡邊	奈保	(人文学部法律経済学科 2 年)	
	石川	裕菜	(教育学部学校教育養成課程社会科教育コース 1 年)	
	武藤	歩美	(教育学部学校教育養成課程社会科教育コース 1 年)	
	宮澤	ひかる	(医学部看護学科 1 年)	
	成毛	遥希	(生物資源学部共生環境学科 3 年)	
	山中		(生物資源学部共生環境学科 1 年)	

1 0	. 吉井	達樹	(生物資	資源学部共生環境学科 1 年)	79
1 1	. 長縄	真吾	(引率	国際交流センター特任准教授)	81
VI.	巻末	資料			82
1.	担当者一	覧			83
	(1)分里	・ 訪問 タ	先担当者-	- 覧	83
	(2)口5	ジ担当者-	一覧		84
	(3)ホー	ーチミンī		学との合同フィールドリサーチグループ分け	85
2.	シラバス				86
3.	終了後の	参加者ア	ンケート	集計	90

I. 概要

1. フィールドスタディの概要

日程:2015年9月13日(日) - 9月25日(金) (計13日間)

行先:ベトナム社会主義共和国

[南部8日間(ホーチミン市)、北部5日間(ハノイ市)]

目的: グローバル人材に求められる要素を総合的に向上させ、グローバルな視野を持ちながら主体的・積極的に行動できる人材となることを目指す。

(①不測の事態への対応能力、②コミュニケーション能力、③将来のキャリアと目指す人材像の明確化、④グローバルイシューへの理解、⑤各訪問先のアレンジ経験を通じた社会人としての基礎的素養の習得、⑥帰国後大学内や一般市民に経験を伝える)

単位数:教養教育科目2単位

参加費用:航空券代、海外旅行保険代、宿泊費、食費等含め、計13万円ほどを自己負担。 (レンタカー代のみ大学負担)

参加者選考方法:学内全学部・研究科より公募、面接を経て選考

参加者氏名(10名)

学生 稲葉 歩 (人文学部法律経済学科3年)

速水 友梨乃 (人文学部法律経済学科3年)

五藤 咲蓉子 (人文学部法律経済学科2年)

渡邊 奈保 (人文学部法律経済学科2年)

石川 裕菜 (教育学部学校教育養成課程社会教育コース1年)

武藤 歩美 (教育学部学校教育養成課程社会教育コース1年)

宮澤 ひかる (医学部看護学科1年)

成毛 谣希 (生物資源学部共生環境学科3年)

山中 理奈 (生物資源学部共生環境学科1年)

吉井 達樹 (生物資源学部共生環境学科1年)

引率 長縄 真吾 (国際交流センター特任准教授)

2. 全体日程

	上 件 -	- 1 <u>1</u> 工	I	T
日付	曜日	АМ	PM	夜
9 月	(日)	08:00 中部国際空港集合	15:00 頃:ホテルチェックイン	ホーチミン市
13 日		10:15 名古屋発 → 13:45 ホーチミン市着	16:00:キックオフミーティング	泊(FFSC)
		(VN341)		
9 月	(月)	10:00- ホーチミン市師範大学 訪問	13:00- フィールドリサーチ事前打ち合わ	ホーチミン市
14 日			せ、フィールドリサーチ(学内・街頭インタ	泊(FFSC)
			ビュー等)	
9 月	(火)	08:00-	13:00 フィールドリサーチ発表会(ホーチ	ホームステイ
15日		フィールドリサーチ発表準備(ホーチミン市師	ミン市師範大)	(師範大学生
		範大学)	17:00:各自ホームステイ先へ移動	宅泊)
9月	(水)	(ホームステイプログラム)	(~16:00 ホームステイプログラム)	ホーチミン市
16 日				泊(FFSC)
			17:30 振り返りミーティング@FFSC	
9月	(木)		 14:00 ホーチミン都市鉄道(鉄道建設現	ホーチミン市
17 日			場訪問)	泊(FFSC)
		10:00-12:00 KAIZEN 吉田スクール	 (帰路バス内で振り返りミーティング)	
9 月	(金)	08:15 FFSC 事務所にてブリーフィング	14:00 - 16:30	ホーチミン市
18日		AM:	レ・ゴク・ハン小学校訪問	泊(FFSC)
		【グループ1】:FFSC ビンチュウセンター訪問	(筑波大と合同)	
		【グループ2】:ツーヅー病院平和村・産婦人		
		科訪問 (筑波大と合同)	(帰路バス内で振り返りミーティング)	
9月	(土)	AM:クチトンネル見学	PM: イオンショッピングセンター見学、	ホーチミン市
19 日		(帰路バス内で振り返りミーティング)	自由行動	泊(FFSC)
	<u> </u>			

日付	曜日	АМ	РМ	夜
9月	(日)	08:00 - 11:25 ASEAN8か国代表による 日本	17:00:ホーチミン発 → 19:05 ハノイ着	ハノイ泊
20 日		語スピーチコンテスト傍聴	(VN262)	(Quoc Hoa
				Hotel)
		12:00 - 13:30 スピーチコンテスト懇親会		
9月	(月)		14:00 - 15:30 女性開発センター有松隊	
21 日		09:00 -10:00 JETRO ハノイ事務所訪問	員(コミュニティ開発) @日本センター	ハノイ泊
				(Quoc Hoa
		10:30 -12:00 日本ベトナム人材開発センタ	17:00 - 17:40 NC ネットワーク講演会	Hotel)
		一(VJCC)訪問		
			18:00 日本人駐在員との懇親会	
			(帰路バス内で振り返りミーティング)	
9月	(火)	<ハノイ農業大学訪問(終日)>	13:30-16:30	ハノイ泊
22 日			ハノイ農大学生との交流、シニアボラン	(Quoc Hoa
		9:30 - 12:00	ティア活動視察(小嶋 SV・中野 SV)	Hotel)
		北部中山間地域に適応した作物品種開発プ		
		ロジェクト訪問	(帰路バス内で振り返りミーティング)	
9 月	(水)	09:00 -15:00	(帰路バス内で振り返りミーティング)	ハノイ泊
23 日		ドンラム村訪問 (文化体験(お菓子作り)、		(Quoc Hoa
		遺跡保存事務所ブリーフィング、中学生との		Hotel)
		ディスカッション、伝統衣装体験等)		
9月	(木)	09:00 -11:00	PM: 自由行動	機中泊
24 日		JICA 森林プロジェクト訪問(宮薗チーフアド		
		バイザー)(@JICA ハノイ事務所)	21:00 ホテルチェックアウト、空港へ	
			(空港にて報告書作成に関する打ち合	
			わせ)	
			24:15 ハノイ発(VN346)	
9月	(金)	06:15 名古屋空港着、空港にて解散		
25 日				

3. 要約

ベトナムフィールドスタディ (VFS) は、13 日間という短い期間で行われましたが、それ以上に内容の濃い、充実したものとなりました。その中で私たちは何を経験し、何を学び、何を得たのか。以下、簡潔に記します。

「学生との交流(異文化交流)」

まずは三重大学との協定校であるホーチミン師範大学学生との交流。ホーチミン市に到着した次の日から、日本語学科の学生とともに 1.5 日間の合同フィールドリサーチを行いました。師範大生とは日本語でコミュニケーションをとっていましたが、独特のイントネーションがわからなかったり、私たちが普段何気なく使っている言葉が彼らにとっては難しいもので通じなかったりと、意思疎通に苦労する場面も多々ありました。その他にも師範大学の学生とは、ホームステイや訪問先への同行など多くの交流の機会がありました。次に、ベトナムの小学生との交流。簡単な英語や身振り手振りを折りまぜながら、折り紙や福笑いなどの日本の遊びを通じての交流を行いました。そしてハノイ市での、ベトナム国家農業大学の大学生とドンラム村の中学生との英語での交流。参加者の中には、英語での会話を楽しむ人もいれば、英語に自信がなく自分から発言するのをためらってしまう人もいました。この他にも、東南アジア 8 カ国の学生による日本語スピーチョンテストに参加した各国代表の学生、たまたま同時期にホーチミン市師範大学で研修を行っていた筑波大学の学生など、本当に多くの学生と関わることができました。

このような人々と関わる中で、私たちは多くのことに気が付くことができました。英語実践能力の重要性、表情・身振り手振りなどのノンバーバルコミュニケーションの有効性、日本人特有のあいまいな表現が意思疎通の壁となりうること…。そして多くの参加者の印象に残ったのが、「伝えよう」という強い意思をもったベトナム人の学生の姿です。彼らは日本語・英語ともに、文法の間違いなどを恐れることなく、言葉に詰まりながらも自分の思いを一生懸命伝えようとしてくれました。言葉が通じない小学生たちも身振り手振りで必死に感情を表現してくれました。そんな姿に影響されてか、難しい単語を噛み砕いて説明したり、表現を変えたり、普段話し慣れていない英語を使ったり、いつもより大げさに感情を顔に出したりと、なんとかして伝えようという気持ちが自然と私たちの中にも生まれてきました。確かに私たちの間には言語や文化の違いという壁がありましたが、そんなものに対する戸惑いも、高度な語学力も必要はないということを実感することができました。この経験は今後グローバル化する社会で生きていかなければならない私たちにとって、非常に意味のあるものになったに違いありません。

「国際協力プロジェクト等の現場視察」

国際協力に関するプロジェクト訪問は、JICA 南部連絡所で行われた ODA 全般についてのヒアリングから始まり、インフラ整備、保健医療、農業、貧困問題、女性問題、観光振興など多岐の分野にわたりました。青年海外協力隊や JICA シニアボランティアなどの現地関係者との面談を行ったり、協力現場の視察を行ったりすることができました。実際に現場を訪問してみると、事前勉強会だけでは学びきれなかったことや、現地で話を聞いて初めて気が付いた課題が数多くあり、国際協力についてより深く学び、実感することができました。また様々な分野について、専攻や将来の夢が異なる参加者と学んだことで、専攻以外の分野にも興味が湧いたり、他の参加者の意見を聞いて新たな発見が生まれたりと、参加者各々の視野や考え方に変化が見られました。

このような実感や変化は、今まで受けてきた学校での授業や日常生活の中で生まれることはなかったでしょう。とても貴重な経験をさせていただきました。

「将来に向けたキャリア形成」

VFS は将来に向けたキャリア形成に関してたくさんの影響を与えてくれました。国際協力の現場で働く人との面談・交流、日本語スピーチコンテスト後に行われた懇親会、日本人駐在員さんとの懇親会、自分の関心がある分野の訪問先を実際に訪問した時など、影響を受けた場面は人それぞれです。「自分の夢を仕事にしている人に刺激を受けた」、「海外で働いている日本人に話を聞くことで、将来の働き方やビジョンについての考え方が変わった」、「自分が興味のある分野の現状を見ることでそれに対する思いが強くなった」「自分の目標が明確になった」など、影響の受け方も様々でした。これとは別に、ベトナムの若者の勉強熱心な姿を見て、「自分たちも負けてはいられない」「このままでは日本が置いてかれてしまう」といった、今後のキャリア形成につながる発見もすることができました。

海外という日本とは状況がまるで違う場で活躍する日本人や、明るい希望を持ち夢に向かって頑張っているベトナムの若者たち。このような人を間近で見て交流したことは、どのような形であれ、私たち1人1人が将来を考える際必ずどこかで生きてくると思います。

「社会人としての基礎的素養」

訪問先との事前調整や会計など研修を行う上で欠かせない事務的なロジ業務は、学生主体で取り組まなければなりませんでした。社会人のメール作法を用いてのメール、手土産の準備などはもちろん、ホテルでの支払い、レンタカー運転手との打ち合わせ、報告書取りまとめなど様々な業務を学生で分担しました。業務によっては英語でのコミュニケーションを伴うものもあり、日本ではなかなかできない貴重な経験をした人もいます。

初めてのことで戸惑うことばかりでしたが、普段の大学生活ではなかなか学ぶことができない、社会人としてのスキルを学ぶことができました。さらに、各メンバーが担当業務を遂行したことで、社会に出た時に必要不可欠となる、担当者としての責任感、率先力も

身についたのではないかと思います。「学生」が通用しない社会に出ていく前に、社会人と しての基礎的素養を身につけられたことは私たちにとって大きな収穫となりました。

「異なる環境下での対応能力」

当たり前のことですが、日本とベトナムでは環境がまるで違います。VFS ではその違いも体感することができました。私たちを特に惑わせたのは、プログラム実施日前日になっての急な予定変更でしょう。本来なら全員で行くはずであった 2 つの訪問先の受け入れ可能時間が重複してしまったのです。その変更を聞いた時は皆とまどい、あたふたしていましたが、当日は落ち着いて行動することができました。その他、急な大雨で大洪水が起きたり、日本とは比べ物にならないくらい道路状況が悪かったり、レンタカーのドライバーがなかなか集合場所に来なかったり、大々的に開催されたスピーチコンテストが何の説明もなく30分遅れで始まったり、懇親会を行う予定のお店が何の前触れもなく移転していたりと、私たちを困惑させた環境の違いはあげ始めるときりがありません。

この 13 日間で、日本基準で生活してきた私たちの常識は一気に覆されました。しかし、 そのような状況の中生活したことで、無意識のうちに柔軟に物事に対応していく力が身に ついたと思います。

このように、私たちは日本では決して学べなかったこと、ただなんとなく大学生活を送っているだけでは学べなかったことを多く学ぶことができました。今回の学びや経験を多くの人に伝え、共有し、共に考え、行動することこそ、私たちの務めだと思います。

最後に、ベトナムフィールドスタディは、訪問先の方々や、ベトナム人学生とその家族、ベトナムで活躍する日本人や街の人など、書ききれないほどたくさんの「出会い」に支えられた研修でした。今後もベトナムでの「出会い」を大切にし、各々、これからの自分につなげていきます。三重大学ベトナムフィールドスタディにご協力くださった皆様へ、この場を借りてお礼申し上げます。

三重大学ベトナムフィールドスタディ 2015 参加者一同

4. ベトナム社会主義共和国 基礎データ



面積:32万9,241平方キロメートル

人口:約9,250万人(2014年時点、国連人口基金推計)

首都:ハノイ

民族: キン族(越人)約86%、他に53の少数民族

言語:ベトナム語

宗教: 仏教、カトリック、カオダイ教他 GDP: 約1,878 億米ドル (2014 年、IMF)

一人当たり GDP: 2,073 米ドル (2014 年、IMF)

経済成長率: 5.98% (2014年、越統計総局)

(出典:外務省ホームページhttp://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/index.html)

Ⅱ. 事前準備

ベトナムフィールドスタディ 2015 は、メンバー決定から出国までの期間に7回の勉強会を 開き、準備を進めていきました。勉強会の内容は以下の通りです。

• 第1回勉強会 7/3(金) 12:10-12:50: オリエンテーション

メンバーの顔合わせ、自己紹介、フィールドスタディの目的の確認、事前勉強会のスケジュール確認、今後やるべきことの確認を行いました。

第2回勉強会 7/10(金) 12:10-12:50:担当者決定

分野別の担当者を決めました。事前勉強会で分野別のベトナムの概況を発表する担当で す。また、ロジ面での役割分担も決めました。

第3回勉強会 7/27(月)12:10-12:50:分野別発表会の担当者打ち合わせ

分野別発表会のチームの顔合わせ、打ち合わせを行いました。その後、訪問先別担当者 を決めました。(分野別・訪問先別担当者一覧は巻末資料参照)

第4回勉強会 8/10(月)13:30-17:00:分野別発表会1、フィールドリサーチ分野決定 8/10(月)17:30-:懇親会

第1回分野別発表会を行いました。発表会の目的は、「フィールドスタディの各訪問にあたり、当該分野の概況をメンバー全員で理解すること、訪問先毎の概要、目的、質問事項をあらかじめ明確にし、メンバー全員で理解すること」です。各チームは担当分野の概況・課題をパワーポイントにまとめるとともに訪問先の内容を要約したサマリーシートを事前に作成して発表に臨みます。発表時間は15分~20分で、質疑応答は10分です。

第1回発表会では、国際交流/ODA、貧困/教育、都市開発・観光、ベトナムの歴史、文化 交流チーム、の計5つのチームが発表を行いました。またフィールドリサーチで扱うテー マ決定とその担当者を決定しました。

第5回勉強会 8/24(月)13:30-17:00:分野別発表会2

第2回分野別発表会を行いました。経済・日本企業、保健医療/障がい者/女性、農業・生態系保全、の3チームと前回の補足で都市開発・観光チームが発表しました。

 第6回勉強会 9/7(月)9:30-12:30:ベトナム語講座、13:30-17:00:サマリーシート 確認、安全対策、分野別発表会の続き

午前のベトナム語講座では、三重大学ベトナム人留学生の Huong さんを講師に招き、ベトナム語で簡単な自己紹介や挨拶ができるように指導していただきました。また、午後からは安全対策・危機管理オリエンテーションを行い、海外生活での心得を学びました。

• 第7回勉強会 9/11(金)9:30-12:30:ベトナム語講座、13:30-17:00:最終確認 午前のベトナム語講座では、前回の復習とさらに役立つ表現などを学びました。午後からは最終確認として、スケジュールやサマリーシートを見ながら2週間の行動の流れを確認しました。

Ⅲ. 訪問先別報告·感想

各訪問先についての概要と感じたことを報告します

1. ベトナム戦争

【ベトナム戦争の概略】

ベトナム戦争とは、ベトナムが自国の主権を勝ち取るための戦いが東西冷戦の中に組み込まれてしまったことにより、南北に分裂したベトナムで発生した戦争です。1960年よりベトナム人同士の統一戦争として開始され、その後アメリカ合衆国が軍事介入し、1975年まで15年間続きました。第二次インドシナ戦争ともいわれます。

17世紀ごろから 20世紀の中ごろまでフランスの植民地であったベトナムは 1954年のジュネーブ協定により、ようやくフランス軍を北部から撤退させることが出来ました(第1次インドシナ戦争)。

しかし、その後の乱れた内政を安定させるために奔走している間に、南ベトナムではアメリカの介入を受けてゴー・ディン・ジエムを大統領とする傀儡政権が打ち立てられました。ジュネーブ協定では1956年に統一選挙を実施するとされていましたが、ゴー・ディン・ジェムは南北統一を主張したり、自分の政治方針を批判した人々を逮捕したり、処刑するといった独裁体制を敷きました。

その後、ゴー・ディン・ジエム政権に代わって軍事政権が立ち上がる等変遷はありましたが、南ベトナムがアメリカの傀儡であるという状況には変わりはありませんでした。 しかし、軍事政権の不安定な政治によって十分にベトナムを操ることが出来なくなってきたため、アメリカは直接ベトナムに派兵するようになりました。

そして 1964 年のトンキン湾事件(アメリカ側による被害のでっち上げともいわれる)を機に「北爆」と呼ばれる北ベトナムへの無差別爆撃が本格的に行われ始めました。

また 1961 年から 10 年間にわたって、北ベトナムによる南への浸透作戦を防ぐために、 南ベトナムに高濃度のダイオキシンを含む枯葉剤をまき続けました。この枯葉剤は後年に なってベトナム人だけでなく派兵されたアメリカ兵の体にも悪影響を及ぼし、死産や流産、 奇形児等が生まれる原因となりました。

そして戦争が長引くにつれて、地の利を生かしたベトナム人によるゲリラ戦術によって アメリカは多大な費用を費やすことになり、経済が傾き始めました。

そのため、アメリカは 1973 年にベトナムから撤退しました。その後、1975 年に北ベトナム軍により、南ベトナムの首都サイゴンが陥落し、ベトナムの南北統一が達成されました。 (文責:成毛)

(1) クチトンネル

日時:9月19日(土)9:30-11:30

場所:ホーチミン市郊外

① 概要

クチトンネルはベトナム戦争時にベトナム人兵士によって東西に 250km に渡って掘られたトンネルです。現在はテーマパーク化が進み、トンネル幅を大きくしたり、落とし穴などのトラップを見やすいように展示したり、射撃体験ができるようになっています。

当時、爆撃や無駄なアメリカ兵との地上戦を避けるため、あるいは戦いを有利に進めるためにこのようなトンネルはいくつも作られました。トンネル周辺には多くの落とし穴やベトナム兵が身を隠すための隠れ穴などが存在し、地の利を十分に活かした戦いでアメリカ兵士を圧倒しました。

ゲリラ戦術の要となっただけでなく、非戦闘員等が実際に生活を営むための避難所や地雷などの対戦車兵器の製造場所、作戦の打ち合わせ場所、けが人を治療する病院など多くの目的で使われました。複雑に曲がりくねったこのトンネルの建造は現在の技術でも不可能とされ、戦争中のベトナム兵の勤勉さがここからもうかがえます。

② 感想

当日のガイドの手配ができなかったという悪条件を私たちはたまたま通りかかった日本語ガイドを引き連れた団体の後をつけていくという方法で乗り切りました。まず、トンネル内の施設で施設紹介の VTR を見てから、例の団体の後をつけてトンネル(正確にはトンネルを含む公園のようなもの)を回りました。VTR では私たちよりも年下のベトナム人の少年少女が男女の関わりなく前線に出ている様子を称えるかのような紹介のされ方をしていて、日本との"戦争"のとらえ方の違いを少しだけ知ったような気がしました。彼らは戦争中も暇を見つけて農作業をして戦時中の食料を確保していたとも紹介されていました。施設内では落ち葉で簡単に隠せるトンネルの入り口や数々の落とし穴(穴の内部には先端がとがったものが突き刺さっていました)、カムフラージュされた通気口、時折聞こえる銃声(銃撃の体験ができる)など非常に臨場感?のある体験ができました。また、メンバー全員で20mほどのトンネルに入ってみたりもしたのですが、メンバー全員が「こんな洞穴の中でどうやって生活していたのか」と疑問に思うほど息苦しい空間で、当時のベトナム兵の執念のようなものを少しだけ感じることが出来ました。

ついていった団体の日本語ガイドの方によると、戦時中の医療行為には限度があって薬などを使った高度な行為は無理であること、トンネル内に死体の安置所があってそこに一時的に死体を保管していたことなどを教えて頂きました。 (文責:成毛)

(2)統一会堂

日時:9月16日(水)9:00-10:00

場所:ホーチミン市内

訪問者:成毛、渡邊、吉井

① 概要

統一会堂はもともと南ベトナム(アメリカ側の傀儡政権)の大統領の官邸でしたが、「ノロドン宮殿」「独立宮殿」等と呼び名が変わっており、サイゴンが陥落した 1976 年に現在の名称となりました。現在まで大統領官邸はベトナム共和国時代の状態のまま保全されていますが、決して一度も破壊されなかったわけではありません。「独立宮殿」時代にゴー・ディン・ジエム政権に対して起こされたクーデタの際に、南ベトナム軍によって復元が困難なほど爆撃された後に再建されたという過去があります。その後ベトナム戦争終結までベトナム共和国(南ベトナム)の大統領官邸として愛用され、1976 年に無血入場で北ベトナムの進軍を受け入れ、サイゴンが陥落しました。ベトナム戦争と共にあったため、ベトナム戦争を南ベトナムの人の視点から語るために欠かせない施設となっています。

② 感想

師範大生の方 3 人と一緒に 6 人で統一会堂を訪れました。施設内では大きな厨房、フラ ンス風の豪奢な会議室や遊技場などに圧倒されましたが、ベトナムを全く感じさせないそ の施設に少し拍子抜けしたのも事実です。師範大生の方々もこれだけのベトナム戦争時代 の歴史がありながら、どこか他人事のようでそこが少し不思議でした。その前に、ベトナ ム人はあまり政治的な話題について好んでいないという話を聞いていたので「そういうも のか」となんとなく納得したような気持になっていましたのですが、訪問の最中に師範大 生の発した「政治的なことを考えるとアメリカもフランスも、日本でさえも敵になってし まう。そういうのは嫌だ。」という言葉を聞き、合点がいきました。彼らの平和を希求する 気持ちはおそらく日本人を遥かに超えていて、そのことに対して私は頭が下がる思いでし た。そのようなことを考えているうちに地下部分についたのですが、地上部分がかなり豪 華に作ってあったのとは逆にコンクリートの壁で囲われた無機質な空間となっていたこと に驚きました。途中でどこを歩いているのかが分からなくなるほど同じようなコンクリー ト壁が続き、その中でひっそりと大統領の寝室があったのが非常に印象的でした。おそら く暗殺に備えて快適な地上部分では無く、無機質で息苦しい地下部分で大統領は睡眠をと っていたのだと思いますが、それだけで戦争中の殺伐とした雰囲気が伝わってくるようで した。 (文責:成毛)

(3)戦争証跡博物館

日時:9月19日(土)15:10-16:30

場所:ホーチミン市

訪問者: 稲葉、成毛、石川、宮澤、山中、吉井

① 概要

ホーチミン市の中心地にある、ベトナム戦争について学ぶことができる博物館です。3階建ての建物で、ベトナム戦争で実際に使用された戦車や、戦闘機の野外展示、屋内には大砲や爆弾といった遺物の展示がされています。ベトナム戦争の大きな特徴として、世界中のメディアによって自由な報道がされたということがあるため、報道する者から見た戦争という内容の展示が全体の中心となっています。展示されている写真の中には、ピューリッツァー賞を受賞した沢田教一さんの『安全への逃避』もあります。敷地内にはコンダオ島刑務所の牢獄を再現した建物や、写真の中には戦後の枯葉剤の被害者に関するものもあり、戦争による第2、第3の被害に焦点を当て、戦争による被害は戦争が終わった今もなお続いていることを示しています。

② 感想

クチトンネルとイオンの見学の後、自由行動になりましたが、行きたい人が集まって戦争証跡博物館の入口前に降ろしてもらいました。入ってすぐに目に入ったのは、戦争当時に世界各国で行われた、反戦運動の写真でした。日本国内での運動の写真もありました。ただ、「アメリカは出ていけ!」といった内容をアメリカ人はどんな気持ちで見ているのだろうと、今まで被害者としてしか見てこなかった戦争を、他の国で見ることで初めて客観的に考えました。展示は主にベトナム語と、観光客への配慮からか、英語訳がされていて、私はそれを読んで内容を理解していました。しかし、英語を読むのに疲れてきたぐらいで、日本語のコーナーがあり、久しぶりの日本語活字に驚きました。

私が行って最も感じたことは、戦争に対する日本とベトナムの認識の違いです。日本は 戦勝国ではないので、戦争関係の施設となるとどうしても平和教育につなげようとしてし まいます。それは決して悪いことではなく、私は、戦争があってはならないものである以 上、日本のそうした姿勢は正しい、あるべき姿だと考えています。しかしベトナムでは、 クチトンネルでも感じましたが、ベトナム戦争で勝った立場として、戦争で功績をあげた 英雄を称えたり、どんな戦いがあったかなど、被害に焦点を当てる部分が日本と比べて少 ないように感じます。それが悪いことだとは言えませんが、この博物館でも、もっと様々 な報道写真を通して、日本であるような、被害から平和を考えることへつなげているのだ ろうと思っていたらそうではなかったので、少し物足りないように感じました。しかし、 少ないながらも、枯葉剤による被害者や、戦争当時に銃口を突き付けられている子どもた ちの写真、その他、あまりにも残酷な写真があり、ベトナム戦争のことを学べるよい場所 だと思います。また、歴史は立場によって変わるということを実感できました。

(文責:石川)

2. 文化交流

(1)ホーチミン市師範大学との合同フィールドリサーチ

日時:9月14日(月)- 9月15日(火)

場所:ホーチミン市

応対者:ホーチミン市師範大学 日本語学科の学生、教員のみなさん

① 概要

ホーチミン市師範大学は、教育学部 25 学科を有する教員育成大学です。1956 年にサイゴン大学として設立され、1975 年には南北統一により現在のホーチミン市師範大学に変更されました。2008 年には日本国総領事館及び JICA の支援により、日本語学科が設立されました。ホーチミン師範大学と三重大学は、2009 年に学術・学生交流協定を締結し、2014年には協定の更新が行われました。三重大学からは、フィールドスタディの他、国際インターンシッププログラムで毎年、師範大学を訪問しています。ホーチミン師範大学からは、これまでに14名が三重大学に留学しました。教員数815名、学部生数17000名。

合同フィールドリサーチは、VFS の伝統的な活動の一つです、今年は、三重大生 2 名と師範大生 3 名で1 チーム、計 5 チームを編成し、大学内や街中でインタビュー調査を行い、翌日に調査結果をチーム毎に発表しました。調査計画は、出発前に三重大生側であらかじめ案を作成し、到着後にチーム内で相談します。実際のインタビューは師範大生の皆さんにベトナム語の通訳をしていただく形で進めました。

② スケジュール

フィールドリサーチ1日目

9:50-10:30 日本語学科オフィスでご挨拶

10:30-11:30 日本語学科代表 Nam さんによる大学案内

10:30-12:00 食堂でベトナム料理を味わう(師範大生・筑波大生と)

13:00-グループに分かれてフィールドリサーチ

フィールドリサーチ2日目

AM フィールドリサーチ発表準備

PM 発表会、出し物

③ 感想

師範大学では、初めに日本語学科代表のナムさんが師範大学を案内して下さいました。 敷地はかなり広く、学生も多くて、高校も隣接していました。その後の昼食では、食堂で 歓迎の料理が用意されており、師範大生と筑波大生と一緒に食べて交流しました。 昼食後は、グループに分かれてフィールドリサーチです。難しいテーマもあり、伝えるのに苦労しているグループもあったようですが、師範大学の学生さん達が積極的に協力して下さったこともあり、全体的にスムーズにリサーチを進められていたと思います。リサーチの場所は師範大学やショッピングモールの中で、ベトナム人の一般の方や生徒の方々は快くアンケートに応じてくださいました。調査が早く終わり、師範大生にいろいろな場所へ連れて行ってもらった三重大生もいたようです。

リサーチが終わった後は FFSC に帰り、各グループでパワーポイントの作成を行いました。早く終わったグループもあれば夜中 3 時ごろまでかかったグループもあり、日本語を勉強中の師範大生にも理解してもらえるよう、言い回しを変えたり、写真を多くしたり、皆それぞれに工夫をこらしていました。

2日目は昨日作成したパワーポイントの内容を説明したり、原稿を作成したりと発表の準備を行いました。皆、協力して作成したことで仲を深めることができたと思います。午後の発表会では、師範大の吉川先生と長縄先生に審査員を務めていただき、各発表毎への講評と優秀グループの発表が行われました。どのグループの発表も素晴らしかったですが、審査の結果、「音楽」チームと「若者文化」チームが同率で優秀賞を受賞しました。発表会の後は、師範大生による歌とダンスが披露され、三重大生も用意していたダンスを披露しました。

(文責:速水)

以下、フィールドリサーチテーマ別担当者からのひとことです。

1)音楽:五藤、山中

私たちは「ベトナムで日本の音楽がどれだけ知られているか」というテーマで調査・発表をしました。ベトナムでは嵐や AKB48、アニソンの認知度が高かったです。特に「ドラえもんの歌」はほとんどの師範大学生が知っており、日本のアニメの影響力は強いと改めてわかりました。反省点は、テーマについての吟味が不十分だったことと、日本と比較するという形で発表できなかったことです。師範大学生たちの積極性や能力の高さも感じることでよい刺激をもらえたので、この反省と気づきを今後に生かしていきたいです。

2)文化教育:速水、武藤

私たちのグループは日本とベトナムにおける文化教育の違いについてリサーチしました。ベトナムにも日本と同じようにさまざまな行事があったり、学校の授業で文化について学んだりするそうです。ベトナムの民族衣装であるアオザイは、頻繁に着る機会があり、夏祭りには浴衣、成人式には振袖など、行事に合わせて衣装の違う日本との違いを感じました。範囲をあまり狭めずにリサーチしたため、考察がしにくかった、という点がありましたが、改めて自分たちの国の伝統文化のすばらしさを感じる

とともに、後世に継承していくことの大切さ・責任についても考えることができました。

3)若者文化:宮澤、吉井

私たちは SNS(Social network service)について調査を行いました。若者文化のなかで流行の受発信を担っており、若者文化を形成するものとして調査を行う価値があると思ったのが動機です。当初は文化の比較をイメージしていましたが、SNS については実際に調査をすると地域性が見当たらなく、改めて SNS が世界での情報共有を可能にするツールだと認識させられる結果となりました。普段私たちも何気なく使用している SNS ですが、もっと世界とのつながりを意識して使っていきたいと思えました。

4)食事:稲葉、渡邊

今回のフィールドリサーチで分かったことは、ベトナムの人たちが思っていた以上に日本に興味を持ってくれているということです。調査中、師範大生が食生活だけでなく日本の文化などに関して質問してくることが多々あったのですが、それに関して簡単な日本語で説明できなかったり、そもそも知らなかったりと、日本人として答えることができないことに不甲斐ない気持ちでいっぱいになりました。世界に目を向けることや、視野を広げて何事にも興味をもつことも非常に重要なこととは思いますが、まずは日本人として、外国人に対して日本の事に関して日本を誇れるように分かりやすく説明できるようにならなければならないと強く感じました。私たちが与えた知識によって新たに日本に興味をもってもらえるかもしれないし、興味を持った外国人が他の外国人に日本のことを紹介するかもしれない、これからの日本と外国の繋がりを広げていく重要な役割を私たち一人一人が担っているのだと気付くことができました。

5)領土問題:成毛、石川

私たちのグループは、中国との間に抱えている領土問題に対する意識の違いをリサーチしました。ベトナムも日本も中国との間にその問題を抱えていますが、ベトナム人学生の方が、この問題に対して関心が高く、学校の授業や家庭で話をしたことがあるという意見が多いことが分かりました。しかし、自国の領土であることを主張するという意見が多かったのはベトナム人学生でも日本人学生でも共通していました。難しい内容であった上に、日本は島国なので海の領土問題しかありませんが、ベトナムは陸も空も問題を抱えていることなど、自分たちの認識が甘かったところがありました。けれども、扱いにくい問題であるために、このような機会にリサーチができて良かったと思います。





(昼食会) (発表準備)





(発表会) (全員で記念撮影)

(2)ホームステイ

日時:9月15日(火) 17:00 ~ 9月16日(水) 16:00

ホーチミン市師範大学の学生の方のお家にてホームステイを受け入れていただきました。 以下、メンバー1人1人のホームステイでの過ごし方や感じたことを記載します。

稲葉: ホームステイ当日にベトナムに台風が来て、道路に水が氾濫し、太ももまで水が浸かりながら約30分家まで歩いたり、洪水のせいで乗っていたタクシーが止まり中にまでも水が入ってきたりと、途上国ならではの体験ができたことが一番の収穫でした。またこのような状況でも、外国人である私の事を常に気にかけて何かと気を遣ってくれた師範大生や、ベトナム人の優しさにホームステイで多く触れられた気がします。

速水: 私がお世話になったお家は中部の人で中部の料理を味わうことができました。また、お母さんはベトナム語しかできないのですが、肩に手を置いたり、手を握ってくれたりと、歓迎して下さっていることがひしひしと伝わり、最後には「ベトナムへ来たときはいつでも来てね」と言って下さって、本当に嬉しかったです。ハプニングやカルチャーショックも多かったですがベトナム人の優しさや実際の生活に触れることができたと思います。

五藤: ホームステイ先に到着後、おばあちゃんに挨拶をしに行ったのですが、おばあちゃんはベトナム語しか通じないので、ベトナム語での自己紹介と、ひたすら「ゴーン! (おいしい)」「カム オーン! (ありがとう)」を連呼したのを覚えています。言葉があまり通じない状況になると、笑顔の重要性が本当に大きいです。フォーを食べに連れていってもらったり、近くの市場に連れていってもらったりしました。家でゆっくりしていた時間も多かったです。

渡邊: 夜は、受け入れ先の師範大生とその友達とベトナムの美味しいフルーツやデザートを食べながら色々な話をしました。受け入れ先の家族とは、言葉の壁に戸惑ってしまったため積極的にコミュニケーションをとることができませんでしたが、私のつたないベトナム語での自己紹介を笑顔で聞いてくださったのが印象的でした。その次の日は、他のVFSメンバーとその受け入れ先の師範大生と合流し、市内を観光したり、フォーを作ってもらったりし、とても充実した一日になりました。ベトナム人の温かさや日常生活の様子を実際に感じることができ、とても良い経験になりました。

石川: 受け入れ先の学生よりもその家族の方が日本語が堪能だったので、コミュニケーションに困ることは全くありませんでした。洪水のせいでタクシーに乗っている時間が長かったり、家の近くを朝から散歩したり、別の友だちも合流して市内を案内してもらったり、そうした時間にたくさん話ができました。生まれたばかりの子どもがいて大変にも関わらず温かく受け入れて下さり、ベトナムの日常にも触れられて良い経験になりました。

武藤: ホームステイ先の家族はみんな英語が堪能で、コミュニケーションに困ることはあまりありませんでした。お金持ちの家らしく、ホーチミンの中でも比較的都会の大きな家で、お風呂とシャワーのついた部屋を貸していただきました。そんな中でも、自分の娘の様に、私に気を使って声をたくさんかけてくださるお母さんとお姉さんがいました。夜は、ホームステイ先の学生の子と自分たちの将来について語り合い、近い将来、お互いにフランス語を話せるようになって再会しよう、という約束をしました。同じ目標を持った友人ができて嬉しかったです。

宮澤: 私がお世話になったホームステイ先は、中華系ベトナム人のお宅でした。 そのため、ベトナム国内にいながら中国にいるような感覚で過ごしていました。ご ちそうになった料理はほとんどが中華料理で、日本人の舌になじみのある味付けで した。家族は皆さん働いていて、英語が堪能なので、会話するときは英語を使いま した。しかし、普段家の中で飛び交う言語は中国語で、師範大生の彼女はベトナム 語・中国語・英語そして日本語の4か国語を使いこなしていました。夜は彼女と2 人で外へジュースを飲みに出かけ、擬音語や若者言葉を説明して、楽しい時間を過 ごしました。その中で印象的だった彼女の言葉は、「ベトナムと中国が対立すると、 「あなたは中国人でしょ」と言われるの。でも、私はベトナム人です!」という言 葉です。日本に住んでいてはなかなか聞くことができない問題だと思います。少し 違ったベトナムが見えました。 **成毛**: ホームステイの日は大雨で町の中が池のようになっていました。そんな悪天候の中、ホームステイ先の家族は僕達を温かく迎えてくれました。特に師範大生の Lam さんとそのお義兄さんは日本語を解していたのでたくさん話をしました。しかし私はベトナム語ができないので他の家族の方とはほとんど話すことが出来ませんでした。その中で迎えてくれたことに対する感謝の意を伝えるためには表情や身振りをフル活用する必要がありましたが、それでも伝えたいことの 10 分の 1 も伝えることが出来ませんでした。今でも Lam さんとは連絡を取り合っていて、彼を通じて家族の方とメールで話すことがありますが、「あの時もっとベトナム語が話せたら…」と思うと残念でなりません。

山中: ホームステイで1番驚いたのは初めて蚊帳に入って床に寝たことです。まさかベトナムに来て蚊帳で寝ることになるとは思いませんでした。ホストファミリーの師範大生は緊張している私に日本語で一生懸命話しかけてくれて、次第に緊張も解けてホームステイを楽しむことができました。反省点はホームステイ中の行きたいところややりたいことを考えてこなかったので、自分の希望を言えなかったことです。でもベトナムのリアルな生活を送る経験ができてよかったです。

吉井: 1泊2日と短い滞在となったホームステイですが、よりリアルなベトナムでの生活を経験することができました。特に朝食後の帰り道では2メートルくらいの道幅の路地に多くの路上販売の店が並んでいる風景は住宅地での生活でしか見えないものだったと思います。食生活、住宅環境で日本とさまざまな違いがあって不便を感じることもありましたが、受け入れてくださった家族とともに食事をして楽しい時間をすごせたことが何より大切な思い出となりました。

ホームステイ先での思い出



(3)日本語スピーチコンテスト・懇親会

日時:9月20日(日) スピーチコンテスト8:00-11:25 、懇親会13:00-14:00

場所:ベンタン劇場(ホーチミン市)

1. 概要

東南アジア 8 ヵ国(インドネシア、カンボジア、シンガポール、タイ、フィリピン、マレーシア、ラオス、ベトナム)の学生による、日本語のコミュニケーションコンテストを膨張しました。「2015 年ホーチミン市の日本語教育国際シンポジウム 東南アジアの日本語教育の役割 グローバル人材育成とつながるネットワーク」のプログラムの1つとして開催されました。コンテストでの審査は、日本語力だけでなく、発言やスピーチの内容のユニークさ、異文化対応力、コミュニケーション力など多角的な視点で行われました。

そして、コンテストの後、出場した8名の学生を中心とした懇親会が行われました。

2. 感想

(1) 日本語スピーチコンテスト『日本語トーク』

コンテストとしては2日間行われましたが、私たちは、2日目に行われたパブリックスピーチを聴かせてもらいました。「未来の私と日本語」というテーマでした。雰囲気としては、日本であるような英語のスピーチコンテストの全国大会、といった感じでした。8名のスピーチを聴くなかで最も感じたのは、単なる日本語の流暢さだけではなく、内容のユニークさ、独自性、日本への想い、そしてそれらを伝える表現力でした。そうした表現力に関して、日本語を「美しい女性」だと表現し、彼女に恋をしている、と話されたベトナムの方が私の中で印象に残っています。日本人はよくあいまいな表現を好むと言われ、今まで私はそれが良くないことだと考えてきました。しかしそのスピーチをされた方は、「日本語はあいまいで複雑な女性ではなく、心の奥に強い思いを秘めた女性なのかもしれない」と最後に言い、私は日本語の美しさ、長い歴史の中で日本人の心の奥底に受け継がれてきた日本人独特の感覚といったものに気づかされました。日本の中にいては分からない、外から見た、そして若い感性で見た新鮮な感覚だと思いました。コンテストでは8名それぞれが事前に考えてきた内容を流暢な日本語で話し、そのスピーチ力に驚かされました。目線の配り方、話す方向、声の抑揚など、これらは自分の将来のためにも手本としていかなければならないように感じました。

スピーチの前後では、ベトナムの伝統舞踊と日本のよさこいの演舞があり、全体として 想像以上に楽しいコンテストでした。

(2) 懇親会

コンテストの後には懇親会があり、いくつかのテーブルに分かれて、それぞれに 8 名の学生たちも分かれて、昼食を食べながら話をしました。その中で感じたのは、私たちと同じようなことを考え、同じようなことで悩む、等身大の彼らと接することができて良かったということです。舞台の上で輝いてみえた彼らも、実際に話をしてみると同じような悩みを抱えていたりして、とても仲良く話をすることができました。

また、席を移って様々な人と話すなかで、横浜で教員をされてすでに退職されたという 方から、長年の経験をもとに多くのアドバイスをいただくことができました。教育学部の 私としては、今後も大切にしたい嬉しい出会いでした。

東南アジア各国の学生と日本語で交流ができるというまれな経験ができたうえに、日本 企業の代表取締役社長、教員をされていた方など、普段の生活ではお話する機会がないよ うな方と話ができた非常に貴重な場となりました。(文責:石川)



(師範大学の学生によるベトナム伝統舞踊)



(日本語トーク 結果発表)



(師範大学の学生によるよさこい演舞)

3. 国際協力・ODA

JICA 南部連絡所

日時:9月17日(木) 8:30-9:30

場所:ホーチミン市

応対者: JICA 南部連絡所 酒井利文 所長

① 国際協力(JICA)と ODA

世界の国々のうち、経済や産業が高度に発達した「先進国」と呼ばれる国は、日本を含め一部の国に過ぎません。一方で「開発途上国」と呼ばれる約8割の国や地域は、その多くが貧困や飢餓、紛争などの問題を抱えています。その中には、一国にとどまらない環境破壊や感染症などの地球規模の問題も孕んでいるため、国際社会全体での取組が重要になっており、先進国の一つである日本も様々なアプローチで国際協力を行っています。その中で、日本の開発途上国への支援の中核をなしているのがODA(政府開発援助)です。ODAには、「二国間支援」と「多国間支援」があり、そしてその「二国間支援」の分野において日本の国際協力を支え続けている機関が、独立行政法人国際協力機構(JICA)です。JICAは、開発途上国の自助努力を支援することを目的として、資金協力や技術協力をその国に最適な方法で使い分けることで、開発途上国における課題解決を支援し続けています。

② JICA のベトナムでの事業概要とホーチミン市・ベトナム南部地域での取組み

ベトナムにとって、日本は最大の ODA 供与国であると同時に最大の直接投資国 (2014年)であり、在留邦人や進出企業の数も年々増加傾向にあり、今後のベトナムと日本の関係はより深化していくことでしょう。それでもまだ様々な問題を抱えているベトナムに対して日本は、①成長と競争力強化②ガバナンス強化③脆弱性の対応、の三本柱で事業を展開しています。

南部での事業を例に挙げると、今回実際に現場を見ることができた、ホーチミン市での 急速な人口増加や公共交通インフラの未整備などによる交通渋滞の深刻化や交通事故の増 大を受けて、交通渋滞や大気汚染の緩和と地域経済発展などを目的として行っている「ホーチミン市都市鉄道建設事業」や、ベトナムの今後の開発に役立つノウハウを持つ日本の 中小企業と JICA が協働して開発プロジェクトを実施し、開発効果と企業の業績アップを両 立させることを目的とした「中小企業海外展開支援」など、様々な事業が現在も展開され ています。

③ 感想

今回国際協力の分野において現地で日本とベトナムの橋渡しをしている JICA 南部連絡 所の酒井所長に会うことができ、直接事業の説明もしてくださるということで担当者とし

てものすごく緊張していましたが、酒井所長自身はとても気さくな方であり大学生の僕ら でも JICA だけでなく、ベトナムやベトナム南部における JICA 事業について分かりやすい 言葉で噛み砕いて説明していただき、すんなりと内容が頭に入ってきました。酒井所長の お話を聞いて、改めて先進国と開発途上国の関係について考えさせられました。なぜ、日 本が国際協力をするのか。なぜ日本自身多くの借金を抱える中、国民からの税金を開発途 上国のために使って支援を行うのか。それが先進国である日本の義務だからと言ってしま えば簡単ですが、もちろんそれだけではない、むしろそれは理由の一つであり他の理由が 重要と僕個人は思います。様々な考え方がありますが、特にその理由の重要性を感じるこ とができたのは東日本大震災のときでした。日本の被害を自分自身のことのように思い、 これまで支援してきた多くの途上国から義援金や物資が届いたことにより、多くの国民が、 日本の支援が無駄ではなかったことを実感したことと思います。日本は、原材料や農産品 などの食糧、石油などのエネルギー資源など生活に必要不可欠なものの多くを開発途上国 からの輸入に頼っています。世界の国々は相互依存の関係にあり、開発途上国の繁栄なく して日本の繁栄はないと言われています。ベトナムも日本を支え続けている国の一つであ り、そんなベトナムが抱える問題を解決することは、ベトナムのさらなる経済発展ひいて は日本の経済発展にもつながることであり、その面においても win-win の関係が築かれて いることがよくわかります。

今回酒井所長にはホーチミンでの JICA 関連訪問先へのアレンジもしていただき、中でも都市鉄道の建設プロジェクトは一緒に現場などを見学させてもらうこととなりました。その時にも酒井所長はもちろん、東京の JICA 本部でこの事業を以前担当していた長縄先生も目を輝かせており、現場で働く人、事業を統括する人、現場とコンサルタントの橋渡しをする人、この事業に関わる全ての人が等しく日本とベトナムの発展に寄与しようという気持ちがひしひしと伝わってきました。同じアジアの国で、国は違うけれど同じ志を持った人の思いを感じることができた経験を大事にすると同時に、こうした人たちのことを双方の国民にもっと広く深く知ってほしいと強く思いました。 (文責:稲葉)



(都市鉄道現場見学後、酒井所長と記念撮影)

なぜ、日本が国際協力を?

- 1 世界は相互依存、途上国の成長と安定なけれ ば日本の繁栄なし
- 2 国境を越えた地球規模の問題解決に貢献する のは先進国の義務
- 3 人道支援、困ったときは助け合う (日本もかつては援助を受けた)
- 4 日本の友を造り、増やすことは未来を明るくする

(酒井所長からのお言葉)

4. 貧困問題・初等教育

(1)ストリートチルドレン友の会 (FFSC)・ビンチュウ能力開発センター

日時:9月18日(金) 8:15-9:15 FFSC ブリーフィング

9:45-11:00 ビンチュウ能力開発センター訪問

場所:ホーチミン市

応対者:FFSC事務所 ベトナム人スタッフ の皆さん

FFSC 事務所 日本人ボランティア の皆さん ビンチュウ能力開発センター職員の皆さん

ビンチュウ能力開発センター訪問者:稲葉、速水、五藤、渡邊、吉井、武藤

① 概要

[FFSC]

ストリートチルドレン友の会(FFSC: Friends for Street Children)はベトナム・ホーチミン市カトリック団結委員会(Catholic Committee of HCM City)の傘下で活動する民間・非営利のベトナムの NGO です。1980年代のホーチミンでは、ベトナム戦争の影響で多くのストリートチルドレンが存在していました。そうした子ども達の状況を嘆いたベトナム人記者の Tran Van Soi 氏が、子ども達に生きる権利と尊重してもらう権利を取り戻して欲しいと私財を投じて設立したのが FFSC です。FFSC は、ホーチミン市 3 区に事務局を構え、約 1100人の子ども達が所属する 7ヶ所の能力開発センターにて生活の場を提供するとともに、公立の学校に通うことのできない 5 歳から 14 歳までの子ども達に、幼稚園から小学校 5 年生までのレベルの教育を 49 のクラスで無料で施しています。また、里親から里子に毎月の教育費を奨学金として寄付してもらう里親制度と呼ばれる制度があり、これによって FFSC 施設または外部の学校でも子ども達が学ぶことが出来ます。こうした FFSC の活動は、里親からの奨学金と企業や個人の支援者からの寄付で成り立っており、無料授業の提供と合わせて重要な活動となっています。

【ビンチュウ能力開発センター】

ビンチュウ能力開発センターは、FFSCが運営する7ヶ所の能力開発センターの一つです。 毎年各能力開発センターでは、家を持たぬ子どもや田舎から移住してきた子どもを受け入 れており、小学校卒業レベルの教育を無料で提供しています。FFSCが行っている教育の最 終目標である子ども達の「自立」のために、子ども達の創造性や基本的な倫理観を育てる ためのレクリエーション、グループ活動や、子ども達だけでなくその親や教師にも命の大 切さや生きるためのスキルを学んでもらうヘルスケアやメンタルケアなども行っています。

② 感想

僕たち参加者のホーチミン滞在中は、この FFSC が運営するゲストハウスに連日宿泊させてもらいました。海外渡航経験がない参加者もいて、日本との環境の違いには特に気を付けなければならない状況だったのですが、毎朝早くから僕たちの食事を用意していただき、炊事・掃除・洗濯などいつも笑顔で生活をサポートしていただいたおかげで、幸い大きく体調を崩す参加者もおらずホーチミンでの各訪問に集中することができ、学びがより良いものになったと思っています。ビンチュウセンターに訪問する前に FFSC 事務所にて日本人ボランティアの方から、FFSC の概要やストリートチルドレンの現状についての簡単な説明を行っていただきました。事前勉強会などでは得られなかった、現地で働いている人だからこその知識や経験を伺うことができたことで、ビンチュウセンターでの子ども達の交流がより意味のあるものに、またベトナムのストリートチルドレンだけでなく貧困の問題について参加者それぞれが考えさせられる時間になりました。

そして遂にビンチュウセンターへの訪問、だったのですが、突然の予定変更により参加者が二手に分かれることになり、センター訪問者はツーヅー病院に、ツーヅー病院訪問者はセンターに行けなくなり、予定の半分での人数での訪問になってしまいました。まずセンターを訪問すると、子ども達はまだ授業中とのことでしたが、それを見学させてもらうことになりました。各教室を訪れると、その度に小学2年生から5年生の子ども達が席を立ち日本語で挨拶をしてくれた後、日本語で日本の童謡(「大きな栗の木の下で」「チューリップ」)を振り付きで歌ってくれました。Loanさんに聞いてみると、授業には日本語の授業もあり、日本に興味をもっている生徒も多数いるとのことで、日本人として嬉しく思いました。交流の内容として、僕たちは去年の参加者と同様にボール遊び・縄跳び・折り紙の三つのグループに2人ずつで分かれて遊ぼうと計画していたのですが、交流会が始まった途端に子ども達が僕たちのところに殺到してきて、縄跳びは気付いたら縄を子供たち自身が回していていたり、折り紙は400枚近く持っていったはずなのに終わり頃にはあと少ししか残っていなかったり、ボール遊びは男の子達がボールをどこかに持っていっていたりと、参加者全員が子供たちの活発さに終始ついていくのに必死であった約1時間でした。

子ども達の溢れんばかりの笑顔に癒された時間ではありましたが、それで終わりではありません。終わりにしてはいけません。ボランティアの方がおっしゃっていたように、センターの子ども達は家庭に何らかの問題を抱えてセンターに通っており、将来の自分や家族のために、昼はセンターに、夜は夜間学校に通うことで、未来を生きるために今を必死に生きています。そんな子ども達の姿勢を直に知り体験することができ、自分を改めて見つめ直すきっかけを与えていただき、こういったベトナムの現状などを少しでも多くの人に伝えていかなければならないという使命感にも似た思いが参加者全員の心に少しでも芽生えたのではないかなと思います。僕たちの心境に何かしらの変化をもたらした貴重な体験でした。 (文責:稲葉)





(左上:子供たちとの集合写真)

(右上: 教室の様子)

(左下:センターの概観)

(2)レ・ゴク・ハン小学校

日時:9月18日(金)14:00-16:20

場所:ホーチミン市

応対者: Lê Ngoc Hân(レ・ゴク・ハン)小学校

Bui Duy Phuong(ブイ・ズイ・フオン)校長先生、Trinh Phuong Trinh(チイン・フオン・チイン)副校長先生、Le Thi Mai Anh(レ・ティ・マイ・アイン)副校長先生、教員の皆さん

① 概要

ホーチミン市内にあり、生徒数が約 1300 人の小学校です。英語教育に力を入れており、 英語のコミュニケーションフェスティバルを開催したり、授業の中で外国語の授業を週 2 回おこなったりすることをカリキュラムの1つにしています。

今回の訪問では、小学校の概要をきいた後、学校内を見学しました。そして、小学生との交流として、事前に準備をしていた「福笑い」をしました。最後には、質疑応答の時間をとっていただきました。

② 感想

今回の訪問をアレンジしてくださったのは、師範大学の Nga 先生です。当日、3 つの住所が手元にあるという非常に不安な状況(後で分かったことですが、校舎が分かれているそうです。私たちは3つ目の校舎に訪問させてもらいました。)でしたが、師範大学のナムさんの案内で無事にたどりつきました。

小学校の概要説明と見学の後、小学生が歌と踊りを披露してくれました。「春が来た」を 日本語で歌いながら、5人の子どもたちが一生懸命、かわいらしい踊りを披露して歓迎して くれました。また、担任の先生も日本語の歌を歌ってくれました。私たちの訪問のために、 子どもたちは昼休みの時間を割いて練習してくれたそうで、慣れない日本語の歌を歌って くれたことはとても嬉しかったです。

この訪問で最も感じたのは、子どもたちの英語能力の高さと学校の英語教育への取り組みが充実していることです。日本との比較ということを大きな目的として行きましたが、子どもたちが何不自由なく英語を話していることに驚かされました。ただ、交流したのが最高学年の5年生であることなどを考える必要はあるかもしれません。日本でも小学校で英語教育が行われていますが、そもそも教員の英語能力に問題があること、本格的に導入されたのがまだ最近であるなど、まだまだ課題があります。日本語は高度で専門的な学問を学ぶことに対応しているので、日本にいる限りは困らないかもしれませんが、英語教育という面では世界に遅れをとっているのではないか、と危機感を抱きました。また日本では、学校で英語を使うのは英語の授業中だけ、というのが公立の小学校では普通ですが、

今回訪問させてもらった小学校のように日常的に英語を使うこと、そのための教員の意識などを考えさせられました。

予定の変更により、午前にビンチュウ能力開発センターに行けなかったことは、私の中の唯一の心残りでしたが、それでもベトナムの教育の現場を見られたことは自分にとって良かったと思います。また、福笑いを作ったときに、前に立って説明などをさせてもらったことは貴重な経験となりました。英語教育に力を入れている小学校であるということから、教育全体というよりは、英語教育という面で日本の教育を考えるよいきっかけとなりました。行って分かったことは、日本の教育の良いところが、教育を受ける機会が平等にあるということかもしれません。ベトナムでも義務教育期間があり、教育を受ける機会は制度上保証されていますが、学校に通うことができないストリートチルドレンの問題があるのも事実です。しかし、家庭の事情で学校に行けない子がいるのは日本でも同じです。ベトナムでは、教育支援の制度が未発達なのではないかと考えました。また、学校に行けない子どもたちを受け入れる機関と学校との連携が足りないのではないか、とも思います。今回の訪問では、英語教育における日本との比較や、教育の在り方を考えることができました。

お忙しい中、歌の披露をしていただいたり、軽食を振る舞って下さったり、最後には、時間が予定よりも長くなってしまったにも関わらず、質疑応答の時間をとって下さってありがとうございました。 (文責: 石川)



(集合写真) (交流の様子)

5. 保健医療・障がい者・女性

(1)リンスアンセンター(孤児院)

日時:9月16日(水)16:00-

場所:ホーチミン市

訪問者:宮澤

孤児院訪問は、本来のスケジュールにはありませんでしたが、同じタイミングで、ホーチミンに滞在していた筑波大学のみなさんのご厚意により、彼らと共に孤児院を見学することができました。ガー先生および学生のみなさんには感謝の気持ちでいっぱいです。

① 概要

孤児院には 0 歳~18 歳の子ども 30 人が暮らしています。全員が HIV 感染者です。彼らは、HIV によって親を亡くしていたり、HIV に感染していたりという理由で、親に捨てられた子どもたちです。中には、急に体調を悪くする子や、急に亡くなる子どももいます。院で生活する子どもの中には、盲目の子や水頭症を患った子、親・家族の愛を知らないが故の荒々しい性格の子どももいます。それに対して、院では医療スタッフを含め 80 人が勤務していて、月に一度は子供たちの健康診断をしています。子供たちの 1 か月の生活費・医療費は合わせて 83 万ドンです。

また、小学 4 年生までは一般の学校に行くことができず、院の施設で勉強します。これは、もし紙で指を切ってしまったとき、自分の血を相手に接触させることなく処理できるようになるのが、だいたいその歳くらいであろうという考えに基づいています。しかし、中には小学 4 年生になっても自分をうまくコントロールできず、学校に行く許可が下りない子どももいます。

② 感想

私が見学した中で一番強く印象を受けたのは、0歳~2歳の子どもたちが生活する部屋です。恥ずかしながら、この部屋で説明を受けるまで、子どもたちが HIV に感染しているとは知りませんでした。そして、子どもたちを見るだけでは、HIV に感染していることは全く考えられませんでした。なぜならば、私が赤ちゃんを抱くと、興味津々で私の顔を覗き込み、ケラケラと楽しそうに笑って、感染しているとは全く考えられなかったからです。私の顔を不思議そうに見る、吸い込まれるような黒い目をみて、苦しくてたまりませんでした。

この子どもたちは、何も悪いことをしていないのに、生まれつき HIV という重荷を背負い、孤児院という箱に入れられ、家族と離れて暮らす現実があります。その現実に対して、私にできることが上手く考え付かず無力な自分がいて、訪問した晩、ボロボロ泣いてしまいました。

この訪問を通して、私の世界が広がったように思います。"HIV"という問題は、知識として知ってはいるものの……という状態だったので、現状を見て知ることができました。そして、HIV/AIDSの問題から目を背けず、真剣に向き合っていく大切さを学びました。

(文責:宮澤)



(院の中庭)

(たくさんの団体が訪問しているようです)

(2)ツーヅー病院産婦人科・平和村

日時:9月18日(金)9:00-

場所:ホーチミン市

応対者:ツーヅー病院リハビリテーション部副長 Nguyen Dac Minh Chau 医師、他

訪問者:宮澤、山中、石川、成毛

① 概要

【平和村】

平和村は、ツーヅー病院内にある施設です。平和村は 1996 年、ドイツ政府の支援によって、ヘルスケア・枯葉剤の影響を受けた子どもたちへの言語教育を担う機関として建設されました。これまでに 500 人の子どもを育ててきました。最近では 60 人以上の子どもたちを、本病院の医療スタッフとして経済的貢献ができるようにサポートしています。また、国内外のチャリティー活動の手伝いも行っています。この支援を通して、何人もの平和村出身の子どもたちが大学進学の夢を叶えています。

【産婦人科】

ツーヅー病院はベトナム南部最大の産婦人科病院で、1年に 62,000 件の出産を扱っています(三重大学附属病院で扱う出産は約 300 件/年)。 一日にして 190 人の新生児が誕生しています。そんなマンモス病院を支えるスタッフは 2200 人で、そのうち 85%が女性です。同伴していただいたホーチミン市師範大学の学生さんの中には「私もこの病院で生まれました」と話す方もいらっしゃいました。

【ベトナムと枯葉剤】

ベトナム戦争において、アメリカ軍はベトナムの緑豊かな地に 8,000 万リットルもの枯葉剤を撒きました。この劇物は、普段私たちが雑草を枯らすために使用する枯葉剤の 1000 倍濃いものが使われ、大木をも枯らしていきました。また、土壌に浸透した枯葉剤は地下水に至り、住民が汚染した水を飲むことで人体に影響を及ぼしていきました。そして、枯葉剤による奇形児の問題は、ベトナム国内に収まらず、散布した側のアメリカ軍兵の奥さんが生んだ子供にまで症状が見られました。

② 当日の流れ

病院に到着した私たちは、病院と平和村の概要について説明を受けました。その後、平和村の中の子どもたちの生活する部屋を見学して回りました。そして、最後に病棟に移動し、産婦人科の出産直前の病床→分娩室→出産直後の病床の順に見学しました。

③ 感想

担当してくださった Chau 先生が話してくださった内容でとても印象深かった言葉があります。「広島は原爆を落とされた。ベトナムは枯葉剤をまかれた。爆弾は一瞬だが、枯葉剤の影響は続きます。」事前学習で枯葉剤について勉強していましたが、「同じアメリカから受けた攻撃」として両国を比較するという視点を持つことができていませんでした。日本では、被爆者認定と闘う方々のニュースをしばしば目にしますが、ベトナムでも戦後、同様のことが起こっています。政府の枯葉剤問題に対する予算が不足し、貧しい人々まで全面支援できていません。また、この問題の張本人であるアメリカは、ようやく昨年から除染作業を開始したそうです。戦争からすでに長時間経過していることもあり、アメリカ政府を訴えるにも十分なだけの証拠が集まらず、ベトナム政府は苦戦を強いられています。事前勉強として、書籍やインターネットを利用してきましたが、今回お話を聞くことで、日本では知りえなかった情報を見聞きすることができました。そして、原爆と枯葉剤を比較していたところでは、「枯葉剤」という一つの問題に集中するだけでなく、マクロの視点から考えることも必要だということが分かりました。この気づきは、病院見学以降のプログラムで活かすことができました。

産婦人科見学では、驚きの連続でした。この産婦人科を一言で表すとすれば、「流れ作業」という言葉がぴったりだと思います。出産間近の妊婦さんたちは大部屋に入れられ、互いのスペースにプライバシーを守るカーテンもなく、びっしりと並べられたベッドに寝かせられていました。いざ分娩となると、分娩室に入ります。出産した後は、病床数が足りず、廊下に寝かされていました。もし、私が出産する妊婦さんの立場ならば、少しも気が休まらないと思います。日本の産婦人科と比較して、不足しているところを挙げるときりがありません。この訪問から学んだことを活かして、今後の勉強に活かしていきます。

(文責:宮澤)



(面談室において説明を受けるメンバー)

(訪問後、平和村前にて)

(3)女性開発センター 有松隊員

日時:9月21日(月)14:00-15:30

場所:ベトナム日本人材協力センター(ハノイ)

応対者:青年海外協力隊(職種:コミュニティ開発) 有松沙綾香 隊員

① 概要

女性開発センターは、ベトナム女性連合傘下にある公共施設で、ベトナム女性のエンパワメント(技術・教育水準・能力などの向上)を目指して設立されました。とくに、少数民族などより困難な境遇にある女性を対象にしています。困難な境遇を代表するものとしては、「家庭内暴力」や「人身売買」が挙げられます。

有松さんは青年海外協力隊員として、コミュニティ開発の分野で2014年3月より2年間の任期でベトナムの女性開発センターに所属しています。ベトナム人のジェンダー専門家(心理カウンセラーやソーシャルワーカーが多い)を対象としたワークショップの実施やFacebookでの啓発活動などを行っています。

② 感想

日本において、「家庭内暴力」という言葉を耳にすることはあっても、「人身売買」という言葉を普段耳にする機会はほとんどありません。だから私は、「人身売買」というものはテレビや新聞、学校の授業などでしか耳にしたことがなく、どこか遠い世界の話のことのように思っていました。けれど、有松さんのお話を聞くにつれて、どこか遠い世界の話だと思っていた「人身売買」が、実際に自分の身近な国で起こっていること、それも被害にあっている女性の中には、自分と同じくらいの少女やもっと幼い少女もいることを知り、「女性の立場」に対する社会的意識の低さを感じ、悲しくなりました。社会の"問題"は明確であっても、社会全体の"意識"を変えていくことは難しく、完全な"問題解決"までは果てしなく遠い道のりだと感じました。私は将来、女子教育に関する仕事をしたいと思っています。そのような仕事に就く上で、必ず今回の話のような『女性の立場』の社会的意識の低さ、というものが障害となってくると思います。けれど同じ女性として、「女

は男より下である」と言う考えを受け入れる社会であってほしくないし、そんな世界であってほしくない。自分に今できることは少ないかもしれないけれど、有松さんも言ってみえた「事実」を知ること・伝えること、できることをしていきたいと思います。 (文責:武藤)



(集合写真)

6. 都市開発・まちづくり・観光

(1)ホーチミン都市鉄道1号線建設プロジェクト

日時:9月17日(木)14:00-18:00

場所:ホーチミン市

応対者:

(i) プロジェクト概要説明

日本工営 増沢達也 プロジェクトディレクター 日本工営 阿部大輝 オフィスマネージャー

(ii) 高架区間現場視察

Sumitomo-CIENCO6 Consortium 小林 義信 ブリッジエンジニアチーフ Sumitomo-CIENCO6 Consortium 居波 晃弘 デピュティーアドミニストレーションマネージャー

(iii) 地下区間現場視察

清水/前田共同企業体 河合信之 プロジェクトマネージャー

同行者: JICA 南部連絡事務所 酒井利文 所長

① 概要

ホーチミン都市鉄道プロジェクトは、JICA が現在ベトナムに対して行っている支援事業の一つで、ODA の資金を円貨で貸し付ける有償資金協力、技術協力がなされています。ホーチミン市人民委員会と多くの日本企業、ベトナム企業が携わっている、STEP (本邦技術活用条件)適用案件です。人口急増や生活水準の向上による交通量の増加に伴う交通渋滞の深刻化、交通事故の増加、大気汚染悪化への対応と地域経済の発展を主な目的として行われ、市内に計 6 路線が提案されています。今回訪問したプロジェクトは、最初に工事実施が具体化した 1 号線建設を支援するもので、国内初めてとなる都市鉄道案件です。ホーチミンの中心部ともいえるベンタン市場前を起点として、約 20 kmの地下区間及び高架区間の都市鉄道の建設を行っています。2019 年の高架区間の部分開業、2020 年の全線開業を予定しています。

今回は始めに日本工営の増沢プロジェクトディレクターにプロジェクト概要の説明をしていただき、その後、高架区間・地下区間の工事現場を見学させていただきました。

② 感想

私がベトナムに行ってまず衝撃を受けたのが、バイクの多さです。写真等で見てはいた ものの、実際に目にした時は圧倒されました。バイク1台に3人乗車は当たり前。通勤ラ ッシュ時はバイクが多すぎて、道路が渋滞。どんな豪雨でもかっぱを着てバイクを運転。 バイクの転倒事故は日常茶飯事。街のあちこちから鳴り響くクラクションの音。日本とは 比べ物にならないほどの排気ガス。このような状況を解決するために行われているのがこ のプロジェクトです。

都市鉄道建設と言うと、聞こえはとても華やかで、「完成したら、ベトナムのバイク問題も解決するだろう」と考えてしまうかもしれません。実際私も、このプロジェクトを知った時はそう考えていました。しかし、自身で考察を深めたり、増沢さんからのお話を伺ったりするうちに、問題解決はそう簡単なものではないということに気が付きました。例えば、鉄道完成後、どうやって住民に都市鉄道利用を促すのか、駅周辺の整備はどう進めるのか、鉄道運転手の育成に関してはどうするのか、など様々な視点にたって考えてみると課題はどんどん出てきます。そしてこれらを解決するためにはまた新たなプロジェクトを立てる必要があります。そこから起こる問題もきっとあるでしょう。一見単純な問題に見えても、実際は複雑に問題が絡み合っていて、だからこそ様々な視点からアプローチすることが非常に重要であるのだと気づくことができました。一大事業に携わる方の生の声を聞くことで、問題解決の難しさも実感することができました。また、そうした大規模で複雑な案件に、日本が中心となって現場で取り組んでいる姿を見学したことで、国際協力の壮大さに気付き、遠いものだと思っていた国際協力を少し身近に感じ、考えることができました。

JICA による交通インフラの整備は今回見学したものの他に、空港、橋の建設、道路の整備、交通安全の強化など多岐にわたって行われています。今後も日本の技術で世界の人々を支援するために、私たち日本人が国際協力に関心を持ち、日本の技術、制度を大切に守っていく必要があると思いました。

今回お忙しい中私たちにわかりやすく説明していただき、親切な対応をしてくださいました増沢様、阿部様、工事現場を案内して下さった小林様、居波様、河合様、そして長い間同行して下さいました酒井様、本当にありがとうございました。 (文責:渡邊)



(2)ドンラム村

日時:9月23日(水)9:00-15:00

場所:ハノイ

応対者:ドンラム村遺跡管理委員会副所長 Nguyen Trong An さん

英越通訳: Bui Nhu Phuoug さん

① 概要

ドンラム村はハノイ中心部から約 45km にある、長い歴史が息づく伝統的な村です。2005年に国家文化財に指定されました。村内には数多くの伝統的な民家が残り、更に建物の建つ敷地の構成、街路等の村全体の構成、集落内のさまざまな公共物も伝統的な形態を保ち、村全体が伝統的な姿を保っています。国家文化財登録以降、徐々に観光客が増えています。村は 5 つの集落から成りますが、今回はそのうちのモンフー集落を訪問しました。訪問目的は、ベトナム文化体験、農村部の文化・生活やまちづくりの取り組み、JICA の協力について学ぶことです。

② 感想

ハノイ中心部からドンラム村に近づくにつれて、バスの窓から見える景色が移り変わっていきます。田園風景が広がり、そこには農作業をする人や野放しにされた牛、お墓が見えました。田んぼの中にお墓があるのは、少し不思議な感じがしました。道路沿いに並ぶ家々の中には、外壁の側面が塗装されていない家があります。側面を塗らなくても、隣の家が隠してくれるからでしょうか。しかし、以前に比べて、側面も塗装する家が増えてきているそうです。ベトナムの成長がこんなところからも感じられます。

ドンラム村に到着すると、ドンラム村遺跡管理委員会副所長の An さんと、英越通訳の Phuoug さんがお出迎えをしてくださいました。いよいよ門をくぐって、村の中に入ります。 村は、生活感が溢れ、平屋建ての建物が並び、道路で野菜を売る人、藁を集める人などがいました。

はじめは、お菓子作り体験です。作るのはケオラクというお菓子です。目の前には山積みの包装済みのケオラクと大量の箱がありました。はじめの作業は箱詰めの作業でした。次には、お菓子の製造の場所に案内していただきました。そこには、コンロ、作業台、お菓子を袋に入れる機械がそれぞれ 1 つずつありました。熱したフライパンに水や砂糖、ゴマ、ピーナッツなどを入れ、根気よく混ぜます。実際に体験させていただきましたが、これが暑いのと、腕が疲れるのとで大変です。次にその混ぜたものを作業台の上で、棒で平らに伸ばします。これもまた力仕事です。その後には、お菓子を 1 つずつ機械で袋詰めします。コンベヤーに 1 つ 1 つお菓子を置くのは、楽しいですが根気がいる作業でした。こ

のお菓子は1回につき 270 ピースでき、それを1日にだいたい50回ほど繰り返すと教えていただきました。

次に、別の伝統家屋に移り、An さんにドンラム村の観光振興やまちづくりについてのレクチャーをしていただきました。まちづくりにおいて大切なことは、村の人々の生活がよくなること、伝統的なものを守ることだそうです。そこには村人の生活がベースにあることを学びました。An さんのお話は英越通訳を通して聞くという形だったので、聞き取りに苦労しましたが、大変貴重な経験でした。レクチャーの後には、村の中学生と英語で交流しました。話は学生らしい話から、村の伝統的なお祭りについて、ドンラム村の暮らし、日本の知識など様々で、大変盛り上がりました。

昼食を風情のある伝統家屋でいただいたあと、伝統衣装体験をしました。伝統家屋のと ころで、村人に衣装を着せてもらい写真が撮れたのは、これも貴重な体験でよかったです。 伝統文化を肌で感じることができました。

ドンラム村での活動の締めくくりは、村内の散策です。お寺の中に入ったり、お土産を買ったりして過ごしました。お菓子作り体験で作ったケオラクはお土産に大人気で、VFSのメンバーは大量に購入していきました。散策途中、私は味噌作りの壺が並んでいるのを見つけました。その壺の近くには、ペットボトル入りの味噌が並んでいました。それにはオシャレなラベルが貼ってあります。実はそのラベル作成はJICAの青年海外協力隊の活動成果の1つで、ブランド化がねらいだそうです。そのような協力のアプローチの仕方もあるのだと感心し、今後のヒントになればいいなと思いました。

このように、ドンラム村ではベトナムの文化、農村の生活を五感で感じ、村人との交流 も経験することができました。それにより、ベトナムの良さをよりいっそう味わうことが できました。

最後に、私のドンラム村への望みは、どのベトナム観光ブックにもドンラム村が載ることです。ドンラム村には、今ある観光資源を活かして、ブランド化やPR活動などを通して、多くの人に知ってもらえるようになってほしいです。私にできることは、身近なひとにドンラム村のよさを知ってもらうことだと思うので、地道に広めていきます。

事前のやりとりから当日の訪問までお世話になった An さん、一日本当に親切に通訳またガイドまでもしていただいた Phuoug さん、お菓子作りの際丁寧に見本をみせていただいた村人の方、衣装を着せていただいた村人の方々、楽しくディスカッションができた中学生のみなさん、本当にありがとうございました。 (文責: 五藤)



(ドンラム村の伝統衣装体験の様子)

7. 経済•日本企業

(1)KIAZEN 吉田スクール

日時:9月17日(木)10:00-12:00

場所:ホーチミン市

応対者:エスハイ社 社長補佐ベトナム国内事業開発担当 里村勇祐さん

営業部門 顧客開拓サポート担当コンサルタント 和田由紀子さん

① 概要

ESUHAI 社とは日本企業向けのベトナム人材育成を軸に、技能実習生派遣、技術者紹介、ベトナム国内人材紹介(幹部人材、工場長、経理長、生産管理、通訳者など)、進出コンサルティングを行っている会社です。

KAIZEN 吉田スクールはベトナム人への ESUHAI 社の教育事業のひとつで、日本語・日本文化・ビジネスマナーなど日本で仕事をするための基本的な規則を教育しています。日本での就業経験を希望する人材が自ら望み、自ら考え、自ら行動するために強い目標意識を持たせ、次のステップの目的を明確に、自主・自立・自律の教育を実践することを目標としています。

ベトナム人材を日本企業に提供し、そこで日本の高度な技能・技術・知識を得て帰国し ベトナムで身に着けてきたものを活かすという流れで日本とベトナム両国がともに発展す ることを目的とした事業です。

② 感想

今回の訪問では KAIZEN 吉田スクールの授業を見学させていただいたあとに里村さんに事業の説明をうけました。この訪問を通じて私は自分が「働く」ということについて初めて自分の立ち位置をしっかり認識して向かい合ったと思います。まず授業見学では学生の「こんにちは」という大きな声に圧倒されました。技術実習生の教室と高度技術者の教室の二つのクラスを見学させてもらいましたが、双方の教室ではそれほど広くはない部屋には生徒の熱気がこもっていて今まで経験したことがない「教室」を感じることができました。学生との質疑応答ではこちらと目線をあわせてはっきりと質問をされ、こちらの背筋も自然と伸びるようでした。その後の里村さんの説明で 1 年間の間に日本語を習得するというお話をきいて驚きました。私は外国語として英語を 6 年間以上勉強しているのにも関わらず、KAIZEN 吉田スクールの学生のようにはっきりと自分の意見を述べる自信がないことに焦りを感じたのです。KAIZEN 吉田スクールの学生は具体的で強い目的意識をもって言語を学んでいます、自分も同じくらい強い目的意識をもって学ばないと何も達成できずに人生が終わるかもしれないと思いました。

里村さんのお話では日本の企業像について自分が今まで意識してこなかったこと、知らなかったことを多く気付かされました。とくに「日本企業の雇用では能力や経験がある人も当然優秀な人と見なされるが、教えたら伸びる人も優秀と見なされる」という言葉を聞いて自分が社会で働くうえで何が必要かということをぼんやりとしか考えてこなかった私はひとつの答えに出会った気がしました。この言葉は当然ベトナム人材が日本で働くときに理解しなければいけないことのひとつではあるが日本人もしっかりと意識する必要があると感じました。また技能実習では食品加工など単純作業な仕事に就くこともありその場合技能・技術を学ぶということになるのか?というこちらの質問に対し「まず現場で働けるようになるには日本語の言語能力が求められる。そして言語を使えるようになるとビジネスのやり取り、処理が出来るようになる。このことはベトナムに帰ってきてから日系企業で働くうえで大きなアドバンテージになる。」という返答をしていただきました。このことはどんな仕事をするにせよ社会人として身に着けるべき力があるということを再認識させられたし、もし日本語以外を用いて仕事をするときも同じ考え方で臨むことが出来ると思いました。

今回の訪問では「日本で働くための能力開発の教育現場を知り、ベトナムから見た日本 を理解することで国際的な日本の立ち位置について再認識する」という訪問目的を自分が 働くという想定と併せて学ぶことができたと思います。 (文責: 吉井)



(教室の様子)

(2)JETRO ハノイ事務所

日時:9月21日(月)9:00-10:00

場所:ハノイ

応対者: Director 竹内直生さん

① 概要

名称は独立行政法人日本貿易振興機構で、国内は東京、大阪、アジア経済研究所、貿易センター (42 事務所) 海外は、56 ヶ国、76 事務所で展開しており、ベトナム国内にはハノイ、ホーチミンの2事務所を設置しています。日本と海外のビジネスを繋ぐための、各種支援を行う機関で、日本企業の海外展開支援や対日投資促進、通商政策への貢献を主に行っています。

② 感想

JETRO ハノイ事務所では、ベトナム経済情勢と進出日系企業動向という全体像のお話をしていただきました。ベトナムへの日本企業の進出において、まずベトナムは中国と東南アジアの結束点であり、メコン広域経済圏の一部に位置し、地勢的優位性をもっています。また、ベトナムの識字率は 93.4%と、6 割台のラオスやカンボジアといった周辺国より高く、文字で指示できることは企業にとってメリットであると言えます。しかし、課題も多く、ハノイとホーチミンという 2 大都市が存在するにもかかわらず、そこを繋ぐインフラが非常に弱く、市場が分断されており、一体した市場ではありません。この点が、首都に出れば市場動向をつかめる他国とは異なる点だそうです。

ベトナムの主要輸出品目は今まで第一次産品や労働集約型の製品が中心でしたが、韓国のサムスン電子が中国からベトナムへ工場移転したことも相まって、近年は電気電子、機械設備、輸送機器と輸出構造を変化させつつあります。しかし、生地や皮、機械等はまだベトナム国内では作ることができないため、海外から買ってこなければならないことが貿易赤字の原因だそうです。日系企業の進出リスクは行政面の突然の変更や賄賂の横行、法制度の不透明性が挙げられますが、メリットとしては人件費の安さや駐在員の生活環境の良さが挙げられるという説明を受けました。

この日は、日系企業の関係の訪問先が多く、一番初めの訪問先である JETRO ハノイ事務 所で全体像を説明していただけたことで、その後の訪問先での説明の理解もより深まった のではないかと思います。また、JETRO の事務所がベトナムにはハノイとホーチミンの二 か所設置されているという事に、日本のベトナムへの期待と市場が分断されているために 進出動向や消費性向が南北で異なるというベトナムの特異性を感じました。お忙しい中、本当にありがとうございました。 (文責:速水)

(3)ベトナム日本人材協力センター (VJCC)

日時:9月21日(月)10:30-12:00

場所:ハノイ

応対者: VJCC チーフアドバイザー 水野隆さん

JICA 本部日本センター事務局 乙黒令子さん

① 概要

日本とベトナム両国政府によって設立された人材育成機関。ベトナムの市場経済化のための人材育成を目的とし、ビジネス教育、日本語教育を実施。また、それらを補完する相互理解促進事業を通じて、両国の適切な相互理解を目指しています。ベトナムでは、2002年3月に政治の中心地であるハノイに、同年5月に商業の中心地であるホーチミンに設立されました。これまでに VJCC が開催したビジネスコース、日本語コース、相互理解促進事業への参加者と図書館の利用者はのべ50万人を超え、これらの活動を通じてベトナムの経済発展と、日本とベトナムの相互理解促進に貢献しています。VJCC の活動は ODA による「日本センター事業」の一つで、日本センターはカンボジア・ベトナム・ミャンマー・ラオス・モンゴル・ウズベキスタン・キルギス・カザフスタン・ウクライナ以上9ヶ国10ヶ所にあり、これらの国々は、前ロシア領または近年に戦争があった社会主義の国々で、市場経済を取り戻すという目的で設立されました。VJCC は貿易大学の組織として存在しています。② 感想

VJCC の建物に入って一番に目に入ってきたのは、大勢で入ってきた私たちには目もくれず自習している学生たちです。入口のすぐ近くに設けられていた自習スペースでは、10人ほどの学生が黙々と学習していました。お話のあと、図書館も案内していただきましたが、たくさんの日本の本と一緒に並べられていた日本語検定N1の内容は日本人の私たちにとっても難しいもので、この二つからベトナム人の日本語学習への真剣さを感じました。

講義室へ案内されてからは、VJCCの活動について、次にベトナムの人口構成と日本の人口構成を比較し、日本とベトナムを繋ぐことの大切さや繋ぐための人材を育成するのが日本センターの役割であることを教えていただきました。また、プロジェクトの目標、ベトナムの裾野産業の弱さがタイへの流出につながることについてなども説明していただきました。TPPのお話は、日本のTPP参加の利点やリスクについては学ぶ機会が多くありますが、他国の事情を知る機会は少なくとても勉強になりました。また、ベトナムの国歌を聴き、日本との国民性の違いなども話していただきました。さらに、水野さんが三重大学出身という事で、英語の大切さや勉強方法など学生生活についてもお話しいただき、実際の先輩のお話を聞けたことで将来のビジョンをつかむきっかけになったメンバーも多かったと思います。今回の訪問で、日本の状況と日本にもベトナムにも協力することによるメリットが多くあるという事を再認識しました。お忙しい中、本当にありがとうございました。

(文責:速水)

(4)NC ネットワーク講演会・日本人駐在員との懇親会

日時:9月21日(月)講演会16:30-17:30 、懇親会18:00-21:00

場所:ハノイ

応対者:鈴木一也さん(株式会社 NC ネットワークベトナム 企画 PR 部 部長)

足立和也さん (EIWO RUBBER MFG.CO.,LTD)

池畑伸子さん (Qualiserv Vietnam)

畑野千鶴さん(元ベトナム青年海外協力隊員)

宮原優紀さん(JAC Recruitment)

① 概要

NCネットワークベトナムはベトナム進出を考えている日本の製造業に対し、主に調達支援、進出支援、営業支援を行っている会社です。市場調査事業を行い、各企業の強み、工場の様子など様々な情報を集め提供する情報提供企業として、革新的営業ツール提供サービス企業として、海外進出・調達サポートのためのコンサルタント企業として活躍しています。

今回、NC ネットワークベトナムの鈴木さんに、「日本は世界で勝負する」というテーマで講演会を行っていただきました。その後、鈴木さんを中心に集まってくださった日本人駐在員の方との懇親会を行いました。日本ではなかなか聞くことができない貴重な経験談をお聞きし、各々得るものがあった懇親会となりました。

② 感想

今回の講演会では、ベトナムの人口推移等のベトナムの概要についてお話いただき、日本の強み・弱み、最後には鈴木さんの夢についてのお話をしていただきました。私は今まで、「日本」についてじっくり考えたことがありませんでした。日本の強み・弱みが何か、気にしたこともありません。しかし今回講演会で客観的に見た日本についてお話を聞くことができ、新鮮な視点から「日本」という国を捉えなおすことができました。また、鈴木さんに、今後の夢についてお話していただいたとき私は正直驚きました。「現代の日本人には夢がない」という話をよく耳にします。私もただ漠然とした夢があるだけで、明確な目標や、将来その職業に就いて具体的に何をしたいのかがわからない状況です。しかし、鈴木さんには将来に関する明確な目標があり、それを語る姿は大学生よりずっと生き生きして見え、とてもかっこよかったです。

その後の懇親会では、日本で教師をやっていた方や、青年海外協力隊としての経験がある方、ベトナム人の男性と結婚して日常生活を送っている方など様々な方に出会うことができました。ベトナムと日本との文化の違いに戸惑い、仕事がうまく進まないことがあるという苦労話もありましたが、駐在員の方々はとても楽しそうにお話していて、海外で働

くことに全く興味がなかった私に、「海外で働いてみたいかも」と思わせるほど、とても魅力的でした。また、転職にマイナスのイメージを抱いていた私でしたが、周りからの目を気にすることなく転職をして自分のやりたいことに挑戦している駐在員さんの姿を見て、とても感銘を受けました。

今回の講演会・懇親会を通して、自分の将来について改めて考えなおすことができました。残された大学生活の中で、妥協することなく、自分が納得いく答えを見つけたいと思います。懇親会に参加してくださった皆様、そして講演会から懇親会の会場、参加者手配まで行ってくださった鈴木様、本当にありがとうございました。 (文責:渡邊)



(懇親会の様子)

8. 農業・生態系保全

(1)北部中山間地域に適応した作物品種開発プロジェクト

日時:9月22日(火)9:30-12:00

場所:ベトナム国家農業大学(ハノイ)

応対者:井芹信之 業務調整員

吉村淳教授(九州大)

① 概要

ベトナムを含む東南アジアでは降雨量が多く、そのため古くから多くの人々を支えられるだけのカロリーをコメという形で生産してきていました。その一方で食料の多くをコメに依存してきました。しかし北部中山間地域は南部と比較して冷涼な気候のため、4割の地域で一期作しか出来ません。さらに農業インフラの未整備も手伝って、域内だけで見るとコメの自給率は6~7割と慢性的な食料不足をきたしています。この問題に対して「農業資材低投入型・高収量・病虫害抵抗性・早生性を備えたイネ新品種を開発し、北部中山間地域に適応させる」という方法で解決を図ることが本プロジェクトにおける最終的な目標です。そのプロジェクトの成果は次の3つであり、それは同時にこのプロジェクトを進める上で重要な柱となっています。

- 1)新技術による高速・大容量の遺伝子判定を利用した遺伝子導入技術
- 2)環境に適した短期生育・高収量・病虫害抵抗性に関する遺伝子を有する有望系統の開発 3)新しく開発したイネの生理生態学的特性の解明

また、本プロジェクトは SATREPS (地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム) と呼ばれる JICA の事業の一つであり、その特色として大学等の研究機関の研究成果を技術協力として国際協力に生かすということが挙げられます。今回訪問したプロジェクトには九州大学と名古屋大学による技術協力が大きな役割を果たしています。

② 感想

当日は大雨による洪水で訪問先にたどり着けないかとも思われましたが、洪水の中でレンタカーがエンストすることもなく、ほぼ時間通りにたどり着くことが出来ました。

井芹業務調整員は非常にフランクな方で、難しい本プロジェクトの概要を簡単な言葉で説明してくださりました。その説明を聞いてわかったのは日本には日本では決して生かされることのない技術がかなり多く眠っているということと、それを生かせる場所が他の国には思いの外多いということでした。例えばコメは日本では過剰生産になっているので「高収量」の形質は必要ないし、冬の寒さが厳しいので「短期生育」による多毛作もあまり現実的ではありませんが、ベトナムでは「高収量」の形質で食料不足が改善し、「短期生育」

によるイネの栽培日数の減少で、農外収入を増やすことが出来るようになった等、思わぬ 副次効果があったという話でした。

その後、吉村先生による説明がありましたが、気になったのはプロジェクト終了後(2015年12月2日)にベトナム国家農業大学がこの事業を本当に引き継ぐことが出来るのか少し心配だ、という話でした。「自分たちだけでも技術研究ができるようになる」ということが出来なくてはこれまでの協力が無駄になってしまうだけでなく、ベトナムの農業の近代化にも大きな影響を及ぼすことが予想されるため、ぜひ研究を続けていってほしいものだと強く感じました。

訪問全体を通して、日本国内だけでなく世界に目を向けてみることで日本の強みはもっともっと生かせるのではないかと感じることが出来ました。 (文責:成毛)



(施設から見える広大な田園風景)

(2)ベトナム国家農業大学生との交流とシニアボランティアとの意見交換

日時:9月22日(火)13:30-16:00

場所:ハノイ

応対者: JICA シニアボランティア 生物工学部植物工学科 花き栽培担当 小嶋洋之さん JICA シニアボランティア 穀物開発研究所 野菜栽培担当 中野年継さん ベトナム国家農業大学の教員、学生の方々

① 概要

1956 年に設立されたベトナム最初の国立大学の一つであるハノイ農林大学が前身。2014 年 3 月に改名し、ハノイ農業大学からベトナム国家農業大学となりました。設立以来、ベトナムの農業開発のための有能な人材育成に大きく貢献してきました。現在学生数は約 38,000 人、教員数は約 1300 人で、農学、畜産、教育、外国語など 14 学部、大学院、4 つの研究機関で構成されています。穀物開発研究所では、ハイブリッド米の開発を中心に、トマトやインゲンマメなどの野菜の育種も研究しています。植物遺伝子工学研究室は細胞工学・遺伝子工学の手法を用いた花き園芸植物の育種を目的とした様々な研究を行っています。JICA は 1998 年から 2004 年まで「ハノイ農業大学強化プロジェクト」、2010 年から 2015 年 12 月まで「ベトナム北部中山間地域に適応した作物品種開発プロジェクト」を実施。

② 感想

午前に引き続きベトナム国家農業大学を訪問させていただきました。午後の最初の1時間は、ベトナムの学生と英語でのグループディスカッションを行いました。1グループは5~6人程度で計3グループを作り、テーマはフリーでした。ベトナムの学生は英語が堪能でスラスラと話題を振ってくれることに驚きました。しかし発音に癖があることや、自分の英語力不足によりなかなか聞き取ることができなかったし、たとえ聞



(英語での交流の様子)

き取ることができたとしても、思ったことを英語にするのは難しく、スピーキング力の無さを実感しました。同じグループの三重大学生は、スマートフォンの写真や紙とペンを使って足りない英語力を補い、一生懸命英語で会話を成立させる努力をしていました。私はもっとコミュニケーションを取りたいという気持ちと努力が足りなかったし、それが基本となってコミュニケーションが成立す

るのだと思いました。これから相手の言っていることを理解したいという気持ちから

英語を学ぶということを忘れず、スピーキング力を上げていきたいです。

グループディスカッションの後、シニアボランティアの小嶋さん、中野さんにご自 身の活動内容の紹介と、質疑応答の時間を設けていただきました。活動は小嶋さんが 花き園芸植物の遺伝子育種、中野さんがイネの遺伝子育種を専門分野としており、学 生への講義を主にしながら、大学の研究の手伝いも行っているそうです。ベトナム国 家農業大学は英語で講義を行うことに力をいれているらしく、日本の大学との差を感 じました。質疑応答では農業についての専門的なことだけでなく、どのような経緯で シニアボランティアになられたか、特に小嶋さんはご自身の人生についても話してく ださいました。その中で印象に強く残っているのは、小嶋さんがおっしゃっていた「海 外でも個人1人1人と付き合っていくと同じ人間だとわかるのに、戦争などで互いを 傷つけてしまうのはもったいない」ということです。これは小嶋さんが長年海外で活 動を行ってきたからこそ感じ取れることだと思います。国籍や言語が違っていても1 人の同じ人間と考えることで、コミュニケーションはもっとスムーズに取れるのだろ うと考えることができました。このように小嶋さんと中野さんが専門的なお話だけで なく人生についても話してくださったので、農業が専門分野でない学生も楽しく話を 聞くことができました。 (文責:山中)



(小嶋さん、中野さんから説明を聞く様子)

(3) 持続的自然資源管理プロジェクト

日時:9月24日(木) 9:00-11:30

場所:国際協力機構 ハノイ事務所

応対者:国際協力機構国際協力専門員

「持続的自然資源管理プロジェクトチーフアドバイザー」 宮薗浩樹さん

① 概要

JICA は開発途上国の自然環境保全に対しても支援を行っています。

1990 年代の森林減少に対し国家戦略として造林に成功したベトナムですが、現在も地域的な森林減少や森林の劣化(天然林の減少)が問題となっています。政府は更なる造林と森林の利用についての見直し、また REDD+(途上国における森林減少と森林劣化からの排出削減並びに森林保全、持続可能な森林管理、森林炭素蓄積の増強)への取組を目指しています。

現在持続的自然資源管理プロジェクトとしてディエンビエン省を含む 5 省で REDD+と生態系管理システムの構築を目的とした政策の制定と実施を目指す活動が 展開されています。今回は宮薗さんに自然環境保全分野の支援の重要性についてお話を伺いました。

② 感想

今回は二つのセッションに分けて訪問を受け入れていただきました。前半ではまず宮薗さんの環境保全の重要性についての説明を受け質疑応答がありました。後半では生物資源学部の学生 2 名がプロジェクトに関する質疑応答の時間を別にとってもらいました。前半では何故環境保全が必要で先進国である日本の技術支援でなにが行われるかについて、専門外の学生にも非常にわかりやすく説明してもらいました。前半の説明部分では私にとっては新たに知識が広がる点は多くなかったものの自分が扱っている分野にどのように興味をもってもらうか、どのようにしたら理解がしやすいのかというアウトプットの部分で宮薗さんのプレゼンテーションに感動しました。事前勉強会ではなかなかほかの学生に興味を抱かせるような問題提起が出来ていなかったことが宮薗さんのお話を聞いているほかの学生の様子をみて初めて分かりました。質疑応答の時間も皆いつにも増して質問をする姿勢が目立ったと思います。

後半の質疑応答ではREDD+について、環境保全の意義についてお話を伺うことができました。私は、REDD+について経済的な仕組みを利用して環境保全を行うことは活動を推し進める上で非常に大きな実行力を持たせることへの期待は大きいが、本当に実現可能なのか、専門とする人からするとどういう認識がされているのか疑問がありました。そして「環境保全など社会が安定して発展するのに必要な基盤作りに対する

支援は遅れがち」「その中で生態系サービスを経済的価値に置き換えるといったわかり やすい評価の仕方が出てきたことは重要でこれからも必要になってくる」という宮薗 さんの意見をきいて自分が関心のあることがこれから必要になるということがわかり うれしかったです。

ベトナムでの環境保全への取組はまだこれからも続くと思います。私は大学にいる間にもっと専門的な知識やコミュニケーションスキルを磨いて、経済発展が続くベトナムで環境保全がどのように社会を支えているのかもう一度学びなおしたいと強く思いました。(文責:吉井)



(左:熱心に説明をしてくださった宮薗さん)



(右:宮薗さんの説明を聞く様子)

IV. ロジ業務

ロジについての感想や次年度に向けた注意事項を各担当から報告します

1. ホーチミン師範大学との連絡:速水

ホーチミン市師範大学の担当はふたを開けてみるとホーチミンでのプログラムのほとんどと関係していました。小学校や病院、スピーチコンテストなどで通訳やスケジュール調整にも関わってもらい、師範大生の力がかなり大きかったように思います。師範大生との会話は伝わりやすいように簡単な単語で簡潔に話すことを心掛けました。師範大生との時間などの調整は一度確認しただけでは伝わっていない可能性もあるので何度も確認したほうがいいと思います。

2. ドンラム村アレンジ: 五藤

訪問前に、訪問先の方とのメールでのやり取りをするという仕事が中心でした。ドンラム村でどんなことをするのか、タイムスケジュール、費用の相談などを、メンバーの意見を取り入れながら先生の指導のもと準備をしました。大変だったことは、すべて英語でのやり取りだったので、伝えたいことをうまく英語で表現することです。反省点は、やり取りが複雑化したのと、遅かったのとで、訪問当日ぎりぎりまでやり取りが続いてしまったということです。また、費用についてはもっと慎重に交渉するべきだったと反省しています。

3. クチトンネル・歴史:成毛

クチトンネルのロジではガイドの派遣を調整しました。 通訳派遣ということであれば語 学学校などからでも派遣はできるでしょうし、出費も抑えられるでしょうが、通訳の方が クチトンネルについてあまり詳しくない場合があることを考慮に入れ、旅行代理店と交渉 することにしました。 交渉する旅行代理店にはスケッチトラベルを選びましたが、時間が あれば他のもっと安い旅行代理店を探してみてもよいかもしれません。 何度かメールを交わしましたが、8 時間の拘束時間で 230US ドルの費用が必要なので引率の先生に相談してみるとよいと思います。 調整を途中まででとどめておいてベトナムで残りの調整をしようと 考えていましたが、師範大生にガイドを頼めることになったので、ガイド派遣をお断りしました。 しかし、クチトンネルに行く日の前日になって師範大生の予定が合わなくなったので、ガイド無しでクチトンネルに行くことになりました。 当日はどうなる事かと思いましたが、日本語ガイドを連れた団体についていくことでクチトンネルを全て回ることが出来ました。

結果的に日本語ガイドの後ろをついていったのはかえって良かったのではとも思いました。 それくらい日本語ガイドの説明が分かりやすかったです。今年は途中で断ってしまいましたが、今後は自力で日本語ガイドの派遣を最後まで交渉したほうが良いと思います。

4. FFSC(ストリートチルドレン友の会)との調整: 稲葉

主に事前にメールで現地の日本人ボランティアの方と詳細な訪問時間やビンチュウセンターでの子供達との交流時間や交流内容と学年・人数などの確認をしました。ある程度であればこちらの要望も快く引き受けてくれるので、参加者全員の意向を聞いたうえで先方に確認してみるといいと思います。また、訪問の際に日本語を話せるスタッフの方がいるか事前に確認しておくのがとても大事です。

5. 宿泊

(1)ホーチミン: 稲葉、石川

ホーチミンでの宿泊は FFSC のゲストハウスに宿泊させていただいていました。一応日本語で書いてあるパンフレットをもらえるのですが、それには書かれていない事項の確認を事前に、もしくは現地についてから確認すること。例えば、朝食の時間や洗濯の方法(今回は前日にやってほしい旨を伝えると翌日には希望通り行ってくれました)などの注意事項です。料金支払いについては、参加者全員一括で払うのか部屋ごとかを事前に決めておくと支払いがスムーズになると思います。

(2)ハノイ: 武藤

ハノイでは Quoc Hoa Hotel というホテルに宿泊しました。日本のホテルと造りが似ていたこともあり、快適に過ごすことが出来ました。朝ごはんは、ビュッフェスタイルで、洋食メインでした。また、近くにカフェやお土産屋さん、スーパーなどもたくさんあり、買い物にも困りませんでした。ただ、どこの通りも同じようなお店が並んでいるので、ホテルの名前と住所をメモしておくことと、常にホテル周辺の地図を持ち歩いておいた方がいいと思います。

6. レンタカー

(1)ホーチミン:吉井

今回バスロジ担当として運転手との連絡、ミーティングでの日程確認を行いました。 当初は日本語が通じない相手とのやり取りに責任を持つ自信がなく不安でいっぱい でしたが、終わってみると意外となせばなると思えるようになりました。(途中で失 敗もしましたが)運転手とのやり取りでは英語も少ししか使用することができず会話 でのやり取りは難しかったのですが、その中で筆談や地図を用いて総合的にコミュニ ケーションが取れたことが成長となったと思います。

(2)ハノイ:宮澤

私はハノイでのレンタカーを担当しました。ハノイでは特に問題も起こらず、担当期間を終えることができました。そして、担当してくださった運転手の方は気さくに話しかけてくださり、安心しました。

7. 会計

(1)ホーチミン: 武藤

会計では、先生から先にお金をある程度集めておいて、会計をした方がいい、というアドバイスをいただき、そのようにしました。また、タクシー代の清算は、遅くとも2日後にはできるようにしました。もう少し早めにできるとよかったのかなと思います。

(2)ハノイ:山中

私は自分から呼びかけてお金を集めるのをためらってしまい、前もって集金を行い全体行動時のお金の支払いをスムーズにすることができませんでした。結果すべて先生に先に払っていただいて後から多額の集金を行うという面倒をかけてしまったので、もっと自分の仕事に責任をもって行動しなければならなかったと反省しています。

8. 報告書取りまとめ: 五藤、渡邊

事前準備のページを作るときに事前勉強会の事項書を参考にしたのですが、実際には事項書に記載の計画通りには進んでおらず、実際の行動を思い出しながらの作業だったので、苦労しました。また、表紙を作るときに思い出がつまった数々の写真の中から厳選するのに頭を悩まされました。

報告書担当になるとこのプログラムをより堪能できます。プログラムを振り返ることが 人一倍多くなるし、パソコンのスキルも身につきます。編集の合間にもう一人の担当者の 渡邊さんとの思い出話も楽しかったです。報告書担当になってよかったです。(五藤)

報告書の取りまとめ作業は、帰国後の仕事でしたが、想像以上に大変な仕事でした。今後にも残る大切な記録となるので、常にどうすれば読む人にVFSの良さが伝わるのかを考えながら目次や内容を考えました。膨大な量の原稿を取りまとめ、書式等を統一するのはとても根気のいる作業です。完成間近になっていろいろな案が出たり、訂正が必要になったりする可能性もあるので、原稿提出締め切りなどを完成日から逆算して早めに設定することが大切だと思います。(渡邊)

V. 感想

メンバーひとりひとりによるベトナムフィールドスタディの感想です

VFS で得たもの

人文学部 法律経済学科 3年 稲葉歩

本フィールドスタディに応募した私の動機としては、途上国の現状をもっと深くもっと広く知りたい!体験したい!というものが大きかったと思います。私は将来的に国際協力の道に進んでいこうと思っているのですが、なかなかこの道に進むとなると、同じ志をもつ仲間が周りにほとんどいなかったり、親や他の大人にあまり理解されなかったりと前途多難です。少しでも行動を起こそうと、国際協力関係のイベントや説明会などに参加していると、自分は日本で何をしているんだ、学生という自分で自由に行動できる今だからこそ積極的に行かなくてどうする、という思いが次第に強くなり、去年はフィリピンに海外ボランティアという形で行かせてもらいました。ストリートチルドレンを中心にフィリピンの貧困問題について考えるという目的だったのですが、事前の下準備が不十分だったいうべきか、積極性が足らなかったというか、あまり自分の中に大きな目標となるようなものを見つけることができる体験ではなかったです。しかし、それを無駄にしないためにも本フィールドスタディでフィリピンでは不十分だと思ったところなどの反省点を活かして、自分の今後の道を歩んでいく上で何か軸となるような考えを得ることができればと、より今回の体験を有意義なものにしようと強く意識していました。

実際にベトナムに訪問してみると、道路や電気のインフラ整備の状況があまり良くないところは気になったのですが、さすがに二大都市であるからか思っていたほど貧困問題が深刻化しているような状況は見られませんでした。しかし、各訪問先に行くたびに経済、政治、教育などの各分野に無視できない問題を孕んでいることが分かりした。表面化していないこの問題は深く深く国の根幹に根付いており、これからも急速な発展を遂げていくベトナムにとっては自分の国だけでは対応しきれない問題もあり、だからこそ日本などの他国からの支援を必要としていること、またその最前線ともいうべき現場ではJICA などの国際協力機関の仲介の下、同じ日本人が今現在も働いているということ、これはベトナムに実際に行ったからこそ身をもって実感できたことであると、まず本フィールドスタディに参加したことは間違いではなかったと感じました。

今回は貧富格差などの問題についてはあまり触れることはできなかったのですが、ストリートチルドレンの問題については触れることができました。こちらも街中ではあまり子供の物乞いや働いているところを実際に見ることはなかったのですが、ベトナム NGO の日本人ボランティアの方にお話を聞いてみると、やはりと言うべきか、現在ホーチミン市の中でも数え切れないくらいのストリートチルドレンが存在しており、しかもその中でも最低限の生活や教育などの支援を受けれる子供は、各 NGO の各拠点のまわりの一定地域に住む子供たちのみであるという現状がありました。さらに、ベトナムという国の性質上、あまり他国にそのような貧困問題を広く知られたくないために、NGO などの活動の広報を

制限されているため、外国人だけでなくベトナム人に対してすら十分な情報を与えることができず、今でも口コミや小さな集会で活動を少しずつ広めているそうです。こうした問題が、ベトナムではベトナム戦争以来ずっと具体的な解決策が施されないままほったらかしにされている現状があり、現地でのNGOなどの活動が制限されている今、こうした現状を日本人の私たちが日本に帰ってから多くの人たちに伝えていかなければならないと改めて実感しました。それと同時に、世界各国では多くの子供達が私たち日本人にとって当たり前のことが当たり前にできない状況にあり、その中でも必死に自分のため、家族のためと努力を惜しまず日々の生活を送っていることや、日本人は努力次第で当たり前のように選択肢の中から、自分の道を選択できる状況が日本で生まれただけで用意されているということを、多くの人はあまり認識していないことに気づくことができました。

個人的に、今回のフィールドスタディで目標としていた今後国際協力の道を歩む上で軸となるような考えを得ることはできなかったです。しかし、それは今回の体験が無駄であったということではなく、それ以外の多くのものを得ることができたということです。このフィールドスタディで、教育、医療、農業など自分の専門ではない分野も深く知ることにより以前よりはるかに興味の幅が広がったし、普通では会うことができないベトナムの今後を確実に支えていくであろう日本人の方のお話を実際に聞くことができたし、次はどこの途上国に行ってどんな問題に注目していこうかという思いが強く強く芽生えました。迷ってる暇があったら積極的に自分から飛び込んでいく、それが自分の思い通りのものでなかったとしてもそれをどう次につなげていくかを考える、視野を広げて物事を捉えれば新しい考え方を得ることができる、日本にある国際機関だけでなくNGOや企業も改めて尊敬できる、やっている事は違えど根本にあるのはベトナム・日本のためにというシンプルな想い、端的に言えばそのようなことを本フィールドスタディを終えて思いました。国際協力に対する明確な自分なりの考えは得ることができませんでしたが、今後につながる自分なりの思いのようなものは得ることができました。



(ビンチュウセンターの子ども達)

(リサーチメンバー)

ベトナムで学んだこと

人文学部 法律経済学科 3年 速水友梨乃

この夏 VFS に参加するとは、4月の時点の私は想像もしていませんでした。小さい頃から世界と関わる仕事がしてみたいという漠然とした思いはあったものの、大学に入ってあっという間に 2 年が経ち、来年から始まる就活に不安を覚えながらも動き出せずにいた私に来たのが VFS 参加の話でした。正直、今までの私なら参加していなかっただろうプログラムでしたが、その時は何故かとても惹かれて参加を決めました。結果、この時思い切って参加を決めて本当に良かったと思います。

まず、今回の旅で学んだ事は、本当の意味での日本の良さです。今まで、海外には観光として訪れるだけだったので、日本は恵まれていると言われてもピンと来ていませんでした。今回、現地の生活に直接に触れた事で、日本国内にいると当たり前の、物が豊富にあり、安全な水・食料・物が24時間いつでも手に入る状況が当たり前ではないことを実感しました。今まで頭では理解しているつもりでしたが、実際にそれがない事を経験してみると日本人の向上心や技術力の高さによって私たちの快適な生活は成り立っているのだという事にも改めて気付きました。また、Facebookを交換した中学生達に後日何度も言われた言葉があります。「日本に生まれたあなたがうらやましい。」私は、他の国の人に対してこの様な感情を持った事が生まれて一度もありません。この言葉を中学生に言われ、そういった感情を持ったことがない事がどれほど恵まれているかにも気付かされました。

このような日本の豊かさを感じると同時に、ベトナムには日本にはないものが多くある事にも気付きました。例えば、言葉にしにくいですが、若い世代の活力やこれからの将来性、またそれに対する期待感などです。私は戦後の高度経済成長期もバブルに沸いた時期も経験していない世代で、今現在の日本しか知りません。ベトナム駐在員の方の一人が今のベトナムは高度経済成長期の日本と似ているとおっしゃっていました。今回、今のベトナムを見ることができたのは、私にとって昔の日本を想像する事ができたという意味でもとても貴重だったと思います。また、今の70代以上の方々が、戦後の何もない時代から今に至るまでを作り上げたという事がどれほどの事だったのかを今回の旅で思い知りました。それだけの人生経験をした今の人達と、同じだけの人としての器を自分が70代になった時、持つ事ができているのでしょうか。同じ経験はできないだろうけれど、様々な人生経験を積んでいられるように、これからは色々な事に自ら積極的に挑戦していきたいと思います。

この VFS に参加して出会った人々は本当に素敵な方ばかりで、とても多くの刺激を受けました。本当に中身の濃い 13 日間だったと思います。ここで学んだ素晴らしい経験をこれからの生活にどう生かしていくのか、じっくり考えたいと思います。

最後に、ベトナムでお世話になった全ての方々、長縄先生、VFS 参加メンバーにはとて も感謝しています。ありがとうございました。

価値ある VFS

人文学部 法律経済学科 2年 五藤咲蓉子

ベトナムでの2週間は私にとって大きなプラスの財産になりました。このプログラムに参加したからこそ学び、身につけられたことがあります。学んだことはたくさんありますが、私にとって特に大きな存在である3つを紹介したいと思います。

1つ目は、知れば知れほど、関われば関わるほど、自分の無力さを感じてしまうということです。そして、その無力さを感じた後には、それでも自分のできることをするのです。このことは、ストリートチルドレン問題に関わる日本人ボランティアの方のお話の中に出てきました。私が普段、社会問題について考える際、答えが出てこずもやもやすることがあります。今では、答えが見つからないこともあるし、調べ考えることに意味があるのだと思うようになりました。それから自分のできることをしようと思います。

2つ目は、英語に対する認識の変化です。ベトナム国家農業大学の学生やドンラム村の中学生との交流等を通して、英語力の必要性を感じたことはもちろんですが、その英語力とは?という点で認識が変わりました。今までは、英語圏の人のように流暢な英語が話せるようにならなくてはいけないと思っていましたが、今では、シンプルな単語・文法を使い、いかに相手にわかりやすい英語を話すかということが大切だと思います。これから英語を使う相手は必ずしも英語圏の人とは限らず、私たち日本人と同じく英語を母国語としない人たちが多いと思います。そのような人たちともコミュニケーションするということを頭にいれて、日々の英語の勉強に励んでいきます。

3つ目は、グローバルな視野です。KAIZEN 吉田スクールで外国人実習生を送り出す側の視点から見たり、ホーチミン都市鉄道の現場を実際に見たりして、人材や技術やお金が国境を越えて動くのを身をもって学ぶことができました。帰国後、TPP などの問題を考える際、今までぴんとこなかったことも、より考えやすくなりました。これから戦っていく相手は、ベトナムで出会ったような溢れんばかりの向上心をもった人たちであるということを忘れずに、社会に出て行きたいと思います。ちなみに、ベトナムの街を走る大量のバイクにある HONDA のマークや街のいたるところにある KARAOKE のマーク等、どれを見ても日本の技術・文化がこれだけ海外に広がっているのだと驚きました。

これら3つのことに加えて、このプログラムは自分を見直すきっかけになりました。それぞれの活動に真剣に取り組む VFS のメンバーの姿、日本語スピーチコンテストでのすばらしいスピーチをした ASEAN の学生の姿、自由行動のときに街案内をしてくれたベトナム国家農業大学の女の子のおもてなし等、きっかけになったことはたくさんあります。真剣にものごとに取り組むことを思い出させ、毎回の振り返りミーティングや訪問先での質問タイムを通して、考える癖もつきました。また、訪問先の担当者を経験することで、責

任感が生まれました。私は正直責任感が強いほうではなかったのですが、これを機に意識が変わりました。

このように VFS は私にとって本当に価値のあるものでした。この学んだことから、さら広げていき、自分を磨いていきたいと思います。そして、この磨いた自分が、誰かの役にたてられるようになりたいです。

ちなみに、これは学んだことではないですが、先生が出発前におっしゃった「現地ではスケジュールにはないいろんなことが起きるよ」という言葉、これは本当にその通りでした。ある日は大雨で道路が海のようになっていたり、ドライバーが迷ったり目的地を間違えたり、さまざまなハプニングがありました。毎日がドラマのようでした。

最後に、7月に出会いそこから勉強会や懇親会を経て、現地では2週間をともに過ごした長縄先生、VFSのメンバーへ一言。VFSのメンバーは個性豊かでおもしろい人たちばかりでした。一緒にいて本当に楽しかったです。移動中やご飯を食べているとき、ホテルの部屋でのおしゃべりなど、あげていったらきりがありません。そして全員が真剣でした。現地での打ち合わせや振り返りミーティング、またフィールドリサーチの発表準備などでのメンバーの真剣さに私はとても刺激されました。長縄先生はたのもしく、頭の中にどれだけ知識が入っているのだろうと思うくらいものしりな先生です。先生は一歩引いて私たちを見ていてくださった気がします。困っていたらそっと手を差し伸べる、そんな感じがしました。メンバーにも先生にも出会えてよかったと心から思っています。

長縄先生、VFSのメンバーのみなさん、本当にありがとうございました。



(ベトナム国家農業大学生との一枚)



(ドンラム村の中学生との一枚)

「フィールドスタディ」だからこそ学べたこと

人文学部 法律経済学科 2年 渡邊奈保

私が VFS に参加した理由は、「なんとなく」です。メンバーの中には青年海外協力隊になろうと思っている、国際協力に関心がある、という人がいましたが、私には全くそのような考えはありませんでした。中学、高校、大学と部活中心の生活を送り続ける中で、本当にこのままでいいのかな、何か新しいことに挑戦したいな、とぼんやり考えていた時にこの VFS に出会い、「大学生のうちに外国行っといたほうがいいってよく聞くし、観光でいくことでは得られない何かが得られるかもしれない」、「昨年の参加者のように、私も VFS に参加したら何かが変わるかもしれない」といった漠然とした思いで参加を決めました。

出発までは、事前勉強会で自分が興味のない分野の勉強をしなければならなかったり、 苦手なプレゼンデーションをしなければならなかったりと正直つらいことが多かったです。 出発前まで部活動に追われて、準備が不十分であったため、不安もあり、「なんで参加を決めたのだろう」と志望動機書を提出した自分を恨んだこともあります。

しかし、実際に行ってみると、その考えは全く違ったものになり、1日1日が充実していました。食べることが好きな私にとって、ベトナム料理はとても美味しかったですし、大きな教会がそびえ立っているそばに家や店がぎゅうぎゅうに並んでいるといった街並みも新鮮でした。そして、ベトナム人の温かさ、親日の心にも驚きました。師範大生が温かく接してくれたのはもちろんですが、日本人だけで街を歩き、地図を広げて目的地を探している時に、知らないおじさんやタクシーの運転手が道を教えてくれたり、地図を書いて途中まで案内してくれたりととても親切にしてくれました。また、統一会堂へ見学に行った際、館内のおじさんに日本語で挨拶され、感謝の気持ちを伝えられたことも印象に残っています。

ここまでは、ただ観光に行くだけでも得られたものでしょう。これだけでは終わりません。期待していた通り、「部活では得られない何か」を得ることができました。中でも大きかったものは、「幅広い視野」です。今回、教育、農業、経済そして国際協力など、様々な分野の訪問先に行きお話を聞くことができました。現場で働く方々のお話を聞き、どの分野も私たちの生活に密接関連しているものであることを実感し、もっと知りたいと思うようになりました。また、学部、学年が違うメンバーの意見を聞くことで、新たな視点に気がつくことができました。さらに、「海外」での研修は、遠くて無関係だと思っていた「世界」という存在をぐっと近いものにしてくれました。ベトナムで働く日本人の方のお話を聞くことで、自分の将来のキャリアに関する視野も広がりました。

このように、VFS は「なんとなく」という理由で参加した私にも大きな変化をもたらしてくれました。しかし、これで満足してはいられません。

私がベトナムで衝撃を受けたもののひとつに、ベトナム人の若者の熱意があります。私

が出会ったベトナム人は、自分の将来の明確な目標を持ち、1日1日を大切にして勉学に励んでいました。その中には、「日本で働きたい」という気持ちを持った人もたくさんいました。グローバル人材が求められる今、このような人々とともに仕事をする機会が増えるであろうことは言うまでもありません。それは楽しみなことでもありますが、日本人以上に日本のことを理解している彼らを相手に働くことには少し不安があります。これから自分がどうしていきたいか、残された大学生活の中でじっくり考えていきたいと思います。

最後になりましたが、私に素晴らしい経験をさせてくださった長縄先生、メンバーの皆 さん、そしてベトナムで出会った全ての方々、本当にありがとうございました。



(初めて飲んだココナッツジュース)



(夜、賑わう市場の様子)



(師範大学の学生とともに)

振り返り

教育学部 学校教育教員養成課程 社会科教育コース 1年 石川裕菜

この夏、海外へ研修に行きたい、そう思っていたところで今回のVFSの話を聞きました。 武藤さんから、一緒に行かないかと誘いを受けたとき、これだ!と思いました。なぜなら、 もともと国際協力に関心があって国際協力入門という講義を受講していたから、中でも東 南アジアでの活動に興味があったからです。参加したきっかけはほんの些細なものでした が、参加して良かったと思っています。

ベトナムでは、多くの貴重な出会いと初めての経験をして、そのどれもが新鮮でした。 青年海外協力隊の方々、JICA のプロジェクトに関わっている方々、様々な立場の方からお 話をきくことができました。先述したように、行く前に国際協力入門の講義を受講してい たばかりで、その講義の中でも JICA の職員の方などから話をきいて、ほんの少しではある ものの、国際協力のことを知った気でいました。しかし、大学の講義ではなく、実際の現 場で話をきくのは訳が違いました。当然のことかもしれませんが、大学の講義では、話を してくださる一人に対して何人もの学生がいます。それぞれが違う価値観を持って、生活 してきた環境も違って、そんな何人もの人間を相手に話してもらいます。学校での学びと はそのようなものかもしれませんが、今回のように一歩外に出て話をきくと、「私とあなた」 という関係で話をきくことができます。だからこそ自分のこととして考えることができ、 視野を広げる良いきっかけとなりました。ハノイでの日本人駐在員の方との懇親会でも言 われたことですが、何でもまずは挑戦してみることが大切なのだと思います。協力隊の方 が、「上手くいかないこともあるかもしれないけど、人生って結局何とかなるよ。」とおっ しゃっていました。転職を何度もされている方で、私の周りにはなかなかいませんが、挑 戦してみることの大切さに気づけたのも、今回行ったからこそ分かったのだと思います。 また、私の中で印象に残っている言葉があります。それは、ドンラム村でディスカッショ ンをした中学生に言われたことです。彼女は日本に関心があって、「日本人として生まれた ことをもっと誇らしく思うべきだ。」と言いました。決して日本人に生まれたことを悪く思 っている訳ではありません。ただ、それは当たり前のことで、そのようなことを考えたこ とがありませんでした。ベトナムへ行って、様々な場所を訪問させてもらい、多くの人に 会う中で、日本のことを見つめなおすこととなりました。ベトナムで日本というと、良い 印象を持たれることが多いです。今回は観光目的で行った訳ではなく、協力の現場に行か せてもらう機会がたくさんあったのでそのような話をきくことが多かったのかもしれませ んが、私自身、日本人として生まれた私は恵まれていると感じました。しかし、それと同 時に、私は日本人なのに日本のことをよく知らないのでは、とも思いました。ホーチミン 師範大学の学生と日本のことを話していても、彼らは知っているのに私は分からないとい うことがたくさんあって、質問されても答えられないことがありました。ベトナムフィー

ルドスタディに参加して、海外で働きたい、もっと外へ出てみたいという気持ちが強くなったと同時に、そのためには、もっと日本のことを知る必要があると感じました。

また、参加して最も考えさせられたことは、コミュニケーション能力です。ホーチミン師範大学へ行った初日、学生からの質問攻めに驚きました。日本語が流暢に話せるかどうかなんてお構いなしに、ずっと話をしていました。また、私のホームステイの相手の方は、日本語よりも英語のほうが得意なようで、上手く日本語で伝わらないときは英語で話をしました。そのときに、あなたは英語が上手ね、と言われたことには驚きました。私はそれまで、英語なんでできないと思っていましたし、今でもそう思っています。しかし、単語だけは分かってしまうのです。これまでの詰め込み教育のせいかもしれませんが、もしかすると、全員ではないにしろ、英語を話せないと思っている日本人も、知識としてだけは持っているのではないかと考えました。それは、残念なことだと思います。英語ができないから、なんて恥ずかしがっている場合ではないと思いました。ベトナムへ行って、今の日本にはないような活気を感じました。世界の中の日本を考えるとこのままではいけない、私も彼らの、「学びたい」という積極的な姿勢を見習わなければならないと感じました。私にもやりたいことがたくさんあるし、夢もあります。しかし、滞在中に出会ったベトナム人学生の勉強意欲には、今のままでは負けているな、と感じました。今ある環境に感謝して、やりたいことをちゃんとやり遂げられるようにもっと努力しなければ、と思いました。

そして、活気に満ち溢れていたのはベトナム人だけではありません。都市鉄道建設事業の見学に行ったときや日本人駐在員の方々との懇親会、シニアボランティアをされている方の話をきいたときなどに感じましたが、滞在中に出会った日本人も生き生きと輝いて見えました。舗装が整備されていなかったり、大雨が降るとすぐ洪水になったり、衛生環境も整っていないなど、まだまだ課題がありますが、そういった問題も含めて真摯に仕事に取り組む姿はかっこよかったです。また、今のベトナムは日本の高度経済成長期と似ていると言われています。私が物心つく頃にはすでに、日本は不況の時代に入っていて、日本がどのように成長してきたのかを見ていないので、ベトナムがこれからどう変わっていくのか、しっかり自分の目で見ていたいと思います。

滞在中、ハプニングもたくさんありましたが、無事に帰ってこられたのは周りで支えてくれた仲間のおかげだと思います。クチトンネルで虫にやられたようで、その日の晩に足が腫れてきたときはどうしようかと思いました。病院に行って細菌感染だと分かるまで、不安で仕方なかったです。その後も腫れは止まらず、ロボットのように歩くしかなくて大変でしたが、そこで助けられたのはメンバーの存在でした。このようなハプニングも含めて初めての経験ばかりで、戸惑うこともあったし、迷惑もたくさんかけたと思いますが、懇親会でも言われたように、挑戦したことでこれからにつながる力を得ることができました。最後になりましたが、ベトナムでお会いした方々、長縄先生、そしてVFSメンバーの皆さん、ありがとうございました。

叶えたい夢となりたい自分

教育学部 学校教育教員養成課程 社会科教育コース 1年 武藤歩美

私はベトナムフィールドスタディを通して、自分の将来について以前から持っていた夢を叶えたいと思うと同時に、新たな目標を持つことができました。私は将来、教員としてアジア・アフリカなどの途上国で女子教育・初等教育の向上に携わる人材になりたいと思っています。だからこそ、私がこのベトナムフィールドスタディに参加した1番の目的は、実際に途上国と呼ばれる国に行って、教育の現場・現状を見ることでした。私がこの研修を通して学んだこと・感じたことについて大きく3つのことがありました。

1つ目は、"学ぶことと経済格差"ということです。私は研修期間にストリートチルドレンのための訓練施設と国立の小学校へ行きました。まず最初に感じた違いは子供たちの体格です。小柄で細身の子が多かったビンチュウ能力開発センターの子供たちと日本の小学校高学年の子供たちと同じような背の高さで、肥えた子もたくさん見られたレ=ゴク=ハン小学校の子供たち。年齢はほとんど変わらないのに、体格の差は目立ちました。違いは体格だけではありません。壁が 1 面完全に空いた教室でぎゅうぎゅうになって座っている子供たちと大きな教室でのびのびと活動する子供たち。私の携帯のカメラが珍しいのかカメラマンになって写真をたくさん撮っていた子供たちとパソコンや携帯をいじっている子供たち。経済格差というものを目の当たりにした瞬間でした。また、ドンラム村に行った時にも、家族に混ざって仕事をしている少年たちがいる一方で、形態をいじったり、私たちよりも英語の話せたりする彼らと同い年くらいの子供たちがいるのを見ました。その場にいるのに、何もできない自分の無力さというものを感じるとともに、自分の夢である途上国での初等教育の向上に関わる人材になりたい、という目標を叶えたいと強く思いました。

2つ目は、"同じ道を進む先輩方"と交流したことです。日本にいて、海外で働いたことのある人と交流する機会は今までにあまりありませんでした。この研修で JICA の職員をはじめ、ベトナムの日系企業で働く日本人の方々や、現地の企業・学校で働く日本人の方々と交流する機会をたくさん得ることができました。その中でも特に私は、青年海外協力隊である有松さんとの交流の機会を持てたことが、この研修において 1 番自分にとってプラスになったできごとでした。青年海外協力隊としての任期を終えた後、どうするのか曖昧だった自分の未来に、有松さんのような道もあるのだと知ることのできたいい機会でした。また、海外の大学院で学ぶ、という道も知りました。有松さんは私とは専攻が違っても、自分と同じ「女性」という観点を仕事にしている方です。有松さんの経験談・人生観は自分にとって刺激的なものでした。

3つ目は"コミュニケーション"ということです。私は英語を話すことが苦手です。聞き取ることはできても、自分の想いを相手に伝えることにおいて、間違えを恐れている自分がいました。ベトナムの師範大学の学生(日本語学科)は、 $1\sim3$ 年間しか日本語を習ってい

ないにも関わらず、日本語で一生懸命話しかけてくれました。分からないことはどんどん 聞いて、自分のものにしようとしている姿を見て、自分がいかに間違いを恐れて、英語を 話そうと、使おうとしていなかったか、ということに気づきました。

予定のぎっしりと詰まった 2 週間のベトナムでの研修は、ぼんやりとしていた自分の進みたい未来に、さまざまな選択肢があることを知ることのできるいい機会となりました。また、日ごろ、一般教養の授業やサークルくらいでしか関わらない他学部の生徒と共に過ごしていく中で、自分とは違う考え・専攻でものを見ている人の意見を知れたこと、言い合えたこと。自分の専攻分野ではない分野について学ぶことで、教育や女性問題以外の国際協力の在り方を学ぶことができたこと。実際に途上国に行き、現地で働く日本人、現地の人々と交流できたことは、自分にとって本当に貴重な体験となりました。この研修を通して、自分の今後について考え直すことができたことも成果です。

最後に、2週間このメンバーでベトナムに行けて良かったです。たくさんの思い出をありがとうございました。



(ビンチュウ能力開発センターの子供たち(左)とレ=ゴク=ハン小学校の子供たち(右))



(師範大学の学生とともに)

ベトナムと私とこれからの私

医学部 看護学科 1年 宮澤 ひかる

ズバリ、ベトナムフィールドスタディでの一番の学びは「自分へ課題を課すこと」です。 私は、その課題についてお話します。

今回のフィールドスタディに応募するにあたって、私は 3 つの志望理由を書きました。 研修を終え、帰国してから読み返すことにしました。果たしてそれらが実現できたのでしょうか。

① 将来の夢の実現への大きな一歩になる

この項目は達成できました。国境なき医師団で助産師として参加したいと考えている私にとって、ツーヅー病院・孤児院見学はとても強いエネルギーを受けることができた訪問でした。私は上にあげた夢をずっと持ち続けてきましたが、医療の勉強がスタートしたばかりで机上の空論に過ぎず、現場について何も知りませんでした。2つの訪問で様々な「いのち」を見て、触れることができました。そこで目の当たりにしたのは、いのちの重さの違いです。HIVに感染している孤児院の赤ちゃんと、ホーチミン随一の大病院で母親の腕の中ですやすや眠る赤ちゃんは、どちらも赤ちゃんです。しかし、両者のいのちの重さは明らかに違います。私は重さの違いに気が付いたとき、胸が苦しくてたまりませんでした。その光景を目の当たりにしてもライセンスをもっておらず、何もできなかったからです。ですから、この経験のおかげで「何としても医療で貢献する!」と自分自身を奮い立たせることができました。

② 他学部の人たちと協力してやっていきたい

この項目も達成できました。実際にベトナムへ行く以前に何度も勉強会がありましたが、正直、その期間に他のメンバーと仲良くなれたと言うと、嘘になります。ベトナムで2週間ともに過ごすことで、お互いを知り、考え、行動できたと思います。特によかった点は、校内であまり接触のない医学部と他学部のお互いが持っている先入観を知ったところです。様々な学部のメンバーと話すことで、素行について考える良い機会になりました。看護は怖くありませんよ(笑) 研修を終えた今では、新たに9人の友人ができた感覚です。ここでできた友人を大切にしていきたいです。

③ 英語のやり取りを経験したい

この項目も見事、達成できました。ドライバーとコンタクトをとるとき、ハノイ農大の学生さんと話すとき…など、英語を話す機会がたくさんありました。少し緊張したものの、自分の言いたいことが言えたし、相手の意思もしっかりと理解できました。少し残念だったのは、ハノイのホテルで出会ったおじさんに「日本はすごいよ!僕はとても感動した!」と、日本をほめてもらったのに、何についてかわからなかったことです。

後から調べてみると、日本代表のラグビーの勝利についてで、情報に疎い自分が悔しかったです。英語が話せるだけでは、対外国人の場面で通用しないと反省した出来事でした。しかし、よかったこともあります。東南アジアの男性は色白のアジア人を好むそうで、何度も話しかけられることがありました。多少迷惑ではありましたが、そのナンパ?のおかげで、褒められる上に、たくさん英語で会話する機会が得られ、結果的にはよい経験ができたなと思います。今までずっと、英語を勉強してきてよかったと思える瞬間でした。

最後になりましたが、研修全体を通して得られた課題は、もっと日本・世界を知る必要があるということです。他国を知ることは、グローバリゼーションの時代、とても大切なことです。しかし、己の国がどうなっているのかわからなければ、元も子もありません。まずは、井の中の蛙に戻って、日本についてもっと深く学びたいと思います。

今回の研修をサポートしてくださったすべての方に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。どうか、レベルアップしていく私をご覧ください。



(ホーチミン1の高層ビルからの夜景)



(独立70周年を記念するモニュメント)

ベトナムから帰って

生物資源学部 共生環境学科 3年 成毛遥希

「ベトナムの地域研究の授業を 1 年次に履修した」「枯葉剤の被害状況をもっと知りたかった」「過去にベトナム人留学生と一緒の授業を多く履修した」・・・

このフィールドスタディに参加した理由にもっともらしいことを挙げようとすると上記のようなものがすぐに思い浮かびます。しかしフィールドスタディの志望動機の最も大きな部分を占めるのは上記のような理由ではなく、「退屈で長い夏休みをもっと有効に使いたい」という暇つぶし目的にも似た理由でした。周りのメンバーのように確固たる目的もなく、ふわふわした状態でベトナムに行くのは正直かなり不安で、「これで本当にいいのだろうか」と何度となく考えました。そんな私の中で印象に残っている訪問先について少し述べてみようと思います。

1 つは KAIZAN 吉田スクールへの訪問です。技能実習生養成のクラスと高度技術者養成のクラスをそれぞれ見学しました。技能実習生の養成クラスでは 1 次産業に関わる職種の技能実習生を目指す生徒が多かったので、農学系の私としては少しうれしかったです。

日本の一次産業を取り巻く環境は非常に厳しく、特に後継者不足は深刻な問題です。国は違っても、一次産業に関わりたいと言ってくれる若者が多く居てくれたことに、救われた思いでした。高度技術者養成クラスでは軍隊のような統率のとれた動きに少し圧倒されましたが、昔の日本のような「礼儀」・「雰囲気を読む」ことを重んじる教育を行っているとのことでした。高度技術者養成クラスの彼らは通常の語学系の学校よりも数段速いスピードで日本語の習得に励んでいるとのことでしたが、脱落者も多く、なぜ厳しい授業内容に耐えてまで日本企業に就職したいのか、最初は全く理解できませんでした。しかし、ベトナムに進出している日本企業の話を副校長の里村さんから伺うにつれて、競争力があまりないと聞かされていた日本企業の良さを知って納得しました。「日本企業には『能力』だけでなく『成長度合い」も優秀さの尺度とするという美点がある」と里村副校長がおっしゃっていました。日本に優秀なベトナム人の人材を送り出した経験に裏打ちされた話は私の今後のキャリアをどのように進めていくべきかを考えるための大きな材料になりました。

2つ目はツーヅー病院の訪問です。病院関係者からお話を聞いた後に枯葉剤被害者の現状を見せてもらいました。非常に凄惨な病状の方もいらっしゃいましたが、そのことに対して「グロテスクだ」「悲惨だ」とはあまり感じませんでした。私が感じたのは意外なことに「焦り」でした。勉学に意欲的な KAIZEN 吉田スクールの生徒の様子を見ても「焦り」を感じませんでしたが、枯葉剤被害者を見ていたら何かに急き立てられているように感じたのです。病院では水頭症でろくに外界を知覚することのできない 18 歳の少女がベッドの上で横たわっていましたが、自分といくつも年が離れていませんでした。そのことが不思議でたまりませんでした。健常者の私が「退屈な日常」を過ごしている間に、この少女はた

だ横たわっていることしかできなかったのです。この少女に周囲の環境を認識することが 出来て、抱いた感情を周囲に伝えることが出来たとしたら、きっと私は怒られるだろうと 思いました。人が正常に生まれるまでにはいくつもの奇跡が必要で、その過程を何らかの 要因で阻害されてしまうと、重い障害を抱えることになる可能性があります。私はそのい くつもの奇跡を自分も知らぬ間に勝ち取っていたのだから、その分充実した日々を送らな ければならないのではないか、となぜかそのように感じました。

3つ目はNCネットワークへの訪問・懇親会です。この訪問では安い賃金を求めてベトナムに進出する日本企業が「賃金」を理由に足元を見られることがあるという事例をベトナム人の生活費のやりくりから洞察されていました。このような視点から考えたことがなかったので、訪問は非常に楽しかったです。しかし、それよりもその後の懇親会はさらに楽しかったです。NCネットワークの鈴木様には自分のキャリアをどのようにするかについて相談に乗ってもらいました。正直、自分の夢を話したら笑われるとばかり思っていたので、その夢を肯定してくれたことがとてもうれしかったです。今学んでいることと将来やりたいこと、この差を私はどのような折り合いの付け方をしていけばよいのかという問題は私自身の手で見つけていかなければならない問題で、その問題の私なりの解決法の一つを「それもいいのではないか」といってくださって非常に精神的に楽になりました。

以上が私にとってのフィールドスタディ中のハイライトでしたが、本当はもっともっと話したいことがたくさんあります。行く先を決めていなかったせいでタクシーの中で右往左往したことであるとか、バイクの往来が激しい横断歩道で何度も車にひかれそうになったり、自分の常識が如何に狭量なものであったことが分かりました。ベトナム語がほとんどわからないので、フィールドスタディ中にできた友人との連絡に用いる言語は主に英語です。英語が流暢ではない者同士のコミュニケーションは存外に難しく、特に日本ならではの概念はほとんど伝えることが出来ませんでした。しかし表情や身振りを用いて必死に伝えようとしたし、相手も必死に理解しようとしてくれたので、かえって精神的な距離は大きく縮まりました。退屈な日常を送る事しかできなかった私には何もかも新しいことだらけで、疲れてしまうこともあったけれど、とても楽しかったです。フィールドスタディで共に過ごしたメンバーの皆、長縄先生、ホーチミン市師範大学の学生の皆様、本当にありがとうございました。

自分を変えるには?

生物資源学部 共生環境学科 1年 山中理奈

私が VFS に参加したのは、話すことが苦手で気づきの浅い、何事も消極的な自分を変えるためでした。結論から言えば「そのような自分を変えることができたか」と聞かれると答えは「できなかった」です。ベトナムで生活する中で変えたいと思う気持ちと努力が足りませんでした。しかし日本に帰ってきて「こうありたい」「変わりたい」という気持ちや意識が明らかに強くなっているように思います。これから私をそんな風にさせた、ベトナムでの経験や気づきを述べていこうと思います。

まずベトナムでのプログラム全体を通して感じたのは、海外で働く日本人の方々はみんなパワフルだということです。日系企業訪問の際、たくさんの方にプレゼンをしていただきましたが、どのプレゼンからも仕事に対する熱意を十二分に感じました。今回ベトナムで2週間生活しましたが、慣れない環境で生活するのは自分が思っている以上に体に負担がかかっているようで、疲れを次の日に残してしまうことも多かったです。そんな環境の中で仕事をしなければならないというのはとても大変で、働くためのスキルのほかに、仕事に対する熱量や生きる力が必要なのだと思いました。

次に懇親会という形で日本人駐在員の方とお話をさせていただいている時に、私が「将来のビジョンが思い浮かばない」とお話したところ、駐在員さんは「今の時点で明確なものを持っているのもいいけど、自分は将来のビジョンなんて人と話しているうちに毎日変わるから、もっといろんな人に話を聞いて柔軟にゆっくり考えていけばいい」と教えてくださり、今の自分のビジョンのない状況を前向きにとらえることができるようになったので、話す機会をいただけて良かったなと思います。

さらにベトナムの学生の皆さんからもたくさんの刺激をもらいました。師範大学の日本語学科の学生は日本語をある程度話すことができるのですが、こちらがベトナムのことを質問して質問の意味はわかるけど答えをどう日本語で表現したらよいかわからない時に、ものを指さしたり一生懸命ジェスチャーで表現したりしてなんとかして伝えようとしてくれて、その姿勢に感動しました。また、ベトナム国家農業大学で学生と英語のディスカッションを行った際には、農大生はスラスラと英語で話題を振ってくれて、語学力の高さに驚きました。私は聞き取れなかったり、聞き取れたとしても英語で表現したりすることができなくて悔しかったです。英語の能力不足に加え、師範大生のようなコミュニケーションをなんとか成立させようという気持ちが足らなかったのだと反省しています。コミュニケーションを取る時の気持ちの大切さと、英語力をもっとつけたいという意識を強く持てるようになったので、これから英語学習をしていきたいです。

また、今回私は初の海外渡航だったのですが、ベトナムという外国で生活していく中で 文化の違いなどがわかるにつれて、「ほかの国はどうなのだろう」「比べてみたい」と思う ようになりました。その比べる対象として日本も挙げられるのですが、自分の住んでいる 国のことでもまだ知らないことがたくさんあるのだろうなと思うようになり、日本のこと ももっと知りたいと思うようになりました。ベトナムは道路が見えないほどバイクの交通 量が多かったり、雨が降るとすぐ洪水になったり、人々が時間にルーズだったりと驚くほ ど日本と違っていて、文化や感覚の違いを知るということはこんなにも面白いことなのだ と思いました。ベトナムへの海外渡航を機にいろんな国へ行って文化や感覚の違いを肌で 感じてみたいと思います。

そして、日本に帰ってきて思うようになったことや意識は、何事も海外基準で考えるようになったことと、海外で働いてみたい、働ける状態にしておきたいと思うようになったことです。今まで「海外なんて怖いから日本国内だけで働きたい」と思っていたのですが、日本とは違う外国の面白さに気づけたので、いろんな国で働いてみたいと思えるようになりました。しかし、働く際のライバルになるであろうベトナムの学生は能力や積極性が高いということを何度も感じさせられ、今の自分のままでは到底敵わないと思います。これからは海外で戦う際に負けないよう語学力や知識をつけていき、積極的な行動をとれるようになりたいと強く思います。そのための基盤となるのは、いろんなことに興味関心を抱き常に情報収集のアンテナを立てておくことと、1つ1つの小さなことを適当に済ますのではなく、努力してより良いクオリティを目指すことだと考えたので、日常生活の中で実践しています。

今できあがっている自分というのは思っている以上に頑固で、すぐに変えるのは難しいのかもしれません。しかし、ベトナムでの経験やもらった刺激から、意識や考えを変えることができたので、その意識を大切にし、外面的な変化につなげていこうと思います。自分を変えるという目的を VFS の中では達成できませんでしたが、これから変えてやろうという気持ちをさらに強く持てるようになったので、参加してよかったと心から思います。

最後にこの VFS は長縄先生をはじめたくさんの人が関わって協力していただいて成り立っているということをベトナム滞在中に感じていたので、改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

意識の変化

生物資源学部 共生環境学科 1年 吉井達樹

今回のフィールドスタディでは当初自分が掲げていた目標を想定以上のクオリティで達成できたと思います。主な収穫としては3つの意識の変化があったと思います。

1つ目はグローバルイシューへの姿勢です。私は参加前までは「国際支援」という言葉を聞いても想像がわかず、メディアで取り上げられた話題についても現実味のある問題として意識することはなかったです。しかし短い間でしたが現地で生活をしてみてベトナムの状況を肌に感じたうえで、現地で国際支援に携わっている方のお話を聞くことで、実感を伴って「国際支援」という言葉に向かい合う姿勢が作れたと思います。またベトナムと日本のつながりがさまざまなかたちで存在することを知ることが出来たのも私にとっては新しい発見でした。恥ずかしいことですがフィールドスタディへ参加する前はベトナムと日本の関係など考えたこともなく、フォーが有名な国という程度の認識でした。しかし今回のフィールドスタディを通じて、日本からの支援が行われていること、ベトナムの発展が日本にも利益となることを学び、国際関係が自分たちの生活そして将来に深くかかわっていることを日常的な感覚に取り入れることが出来たと思います。

2つ目はコミュニケーション力に対する意識です。今回のプログラムへ参加したことで自分の言語能力の低さを痛感しました。一番悔しい思いをしたのがハノイ農業大学での同年代との英語でのディスカッションです。もともと英語が得意だったわけではなく、語学学習に対して少し努力することを諦めていたので自分に期待はしていなかったのですが、いざ対話が始まって「あなたの専門はなに?」ときかれて「biology」という返答しかできなかったときはとても自分が情けなかったです。私は生物資源学部共生環境学科に属していて環境保全について関心があったのですが、それは biology という単語に置き換わるほど単純ではありません。しかし自分の関心の内容や動機を説明する語彙力や話す力がなかったのでお粗末な会話になってしまいました。日本にいるときは英語で表現をしなければいけないというストレスにさらされることはほとんどありませんでした、なので久しぶりにそのストレスにさらされて自分の言語能力を自覚できたのは収穫となりました。

しかしコミュニケーションに関してプラスの収穫もありました。それは会話以外での表現力です。私はベトナムにいる間に常に小さなメモ帳とボールペンを持ち歩いていました。なぜかというと出発前に「ベトナム語をしゃべることはできないからもしかしたら筆談や絵でのやり取りが役に立つかも」という些細な思い付きをしたからです。そしてその予想は的中しました。まずロジの担当であったバスの運転手とのやり取りでは住所と時間の確認で常にノートを使いました(一度ノートを使わず口頭だけで確認をしていたら間違えた場所へ行ってしまいました)。運転手も私も双方が英語が堪能ではなかったので確実な情報のやり取りをするには大変便利でした。また買い物をするときやベトナムの友達と会話す

るときでも絵と言葉と表情と身振りをつかって自分を表現しました。ベトナムで 2 週間過ごして、「言語を完全に理解できなくても相手とのコミュニケーションが取れる」という気付きはこれから海外へ向かうとき不安を払拭する自信になると思います。フィールドリサーチに参加することで今の自分でもできることが見つかったことは大きな収穫になったと思います。

3つ目は自分に興味のある分野への向かい方です。私は今回のフィールドスタディで様々な分野に関する事業について触れることで自分の見識を広めることを目的の一つとしていました。そして事前勉強を含め私にとっての新しい知識を多く吸収できたと思います。特に経済分野では担当した KAIZEN 吉田スクールのような事業が存在しそれが日本を支えていることや、裾野産業の必要性などについて多くのことが知れたと思います。そしてそのおかげで社会への視野が確実に広がったと思います。この視野の変化は当初の目的を達成した結果になったのですが、視野が広がったことで自分が本来興味のある分野が社会の中でどのような位置づけをされているのかということを意識できるようになったと思います。ベトナムでは社会基盤の整備が不十分であったり政治の都合で不合理な政策がなされていたりすることが見受けられました。それらを目の当たりにすると、私の関心がある環境保全への取組みが後回しになっている現実を受け入れ、ほかの社会問題を考慮したうえで解決策を提案しないと、社会のなかで実行力を発揮することができないということがわかりました。

大学生になってからの初めての長期休暇でこのフィールドスタディに参加できたことは 今後の自分の大学生活そして大学を出たあとの人生で大きな意味があるものとなったと思 います。



(ホーチミン市師範大学の友達)

ベトナムフィールドスタディ 2015 を終えて

国際交流センター 特任准教授 長縄 真吾

昨年に引き続き 2 回目のベトナムフィールドスタディ (VFS) の企画・引率を担当しました。

新興国として発展著しい、日本の高度経済成長期に例えられるベトナムという場で、人々や街が発するパワー、エネルギーから今年も多くの刺激と示唆をもらいました。また期待通り(?)、日本ではめったにない想定外の事態もたくさん直面することができました。大洪水の中、膝上まで水につかりながらホームステイ先までたどり着いたり、訪問前日に訪問予定時間が大幅に変更になって急きょ 2 グループに分かれての訪問になったり、予定していた通訳の同行が急遽なくなったりとハプニングの連続でしたが、日本の整った環境に慣れた学生にとっては貴重な経験になったのではないかと思います。

また参加した三重大生 10 名の皆さんとの 2 ヶ月にわたるつきあいからも、多くの新しい刺激と気付きをもらいました。経済、教育、医学、農学など、学年・専攻・関心もさまざまで、日々の振り返りミーティング等で発せられる思いもしない感想やコメントは非常に新鮮でした。また、VFS の伝統である「学生自身による主体的なプログラムのアレンジ」という方針のもと、各訪問先別の下調べや具体的な内容調整、師範大でのフィールドリサーチの企画・実施、訪問先別の交流内容の企画、レンタカーの管理、帰国後の報告書の作成・とりまとめまで、プログラムの相当部分を参加学生の皆さん自身に担ってもらいました。スケジュール変更について深夜自主的に集まって対応策を考えてくれたり、体調不良者がでた際も自主的に学生が病院に同行してくれたりと、頼もしい場面もたくさんありました。参加学生の皆さんの努力と頑張りに敬意を表したいと思います。

いうまでもなく、今回のフィールドスタディは、ベトナム現地訪問先の皆様のご協力と ご厚意がなければ成り立ちませんでした。ホーチミン市師範大学、ベトナム農業大学、FFSC はじめベトナム関係機関の皆様、国際協力に携わる JICA や NGO の日本人スタッフ・ボラ ンティアの方々、ベトナムでビジネスに携わる日本人駐在員の方々、さらには ASEAN 各 国の学生や、一部プログラムで一緒に行動した筑波大生の皆さんなど、本当に多くの方々 から、親身なご対応と示唆をいただきました。ご協力いただきましたすべての皆様にこの 場をお借りして深くお礼申し上げます。

今回のフィールドスタディが、学生の皆さんにとっての今後の成長の糧となるだけでな く、日本とベトナムの相互理解と友好関係・協力関係促進の一助になれば幸いです。 VI. 巻末資料

1. 担当者一覧

(1)分野·訪問先担当者一覧

		分野担当	訪問先	訪問先
				担当
1	ベトナムの歴史	石川・成毛	クチトンネル、博物館	石川·成
				毛
2	文化交流	速水・宮澤	ホーチミン市師範大学	速水・宮
			フィールドリサーチ	澤
			日本語スピーチコンテスト	
3	国際協力・ODA	稲葉・五藤	JICA 南部連絡所	稲葉
4	貧困問題・初等教育	武藤・石川・	FFSC、ビンチュウ能力開発センター	稲葉
		稲葉	レ・ゴック・ハン小学校	石川
5	保健医療・障がい	宮澤・山中・	ツーヅー病院	宮澤
	者・女性	武藤	女性開発センター	武藤
6	都市開発・まちづく	五藤・渡邊	ホーチミン都市鉄道プロジェクト	渡邊
	り・観光		ドンラム村	五藤
7	経済・日本企業	速水・渡邊・	エスハイ KAIZEN 吉田ハイスクール	吉井
		吉井	JETRO ハノイ事務所	速水
			NC ネットワーク講演会、日本人駐在	渡邊
			員との懇親会	
			ベトナム日本人材協力センター	速水
8	農業・生態系保全	成毛・山中・	ハノイ農業大学シニアボランティア	山中
		吉井	北部中山間地域に適応した作物品種	成毛
			開発プロジェクト	
			森林保全プロジェクト	吉井

(2)ロジ担当者一覧

項目	担当者名	業務内容		
ホーチミン市師範大学	速水	スケジュール調整、ホームステイ調整、		
連絡		出し物検討		
ドンラム村アレンジ	五藤	An 所長とのスケジュール調整 (英語)、支払い		
クチトンネル/歴史	成毛	ガイド手配、ハノイでの訪問先検討		
FFSC との調整	稲葉	FFSC・ビンチュウアレンジ、FFSC 宿泊に関する 全体調整		
宿泊	石川・武藤	部屋割り(不公平感が出ないよう要配慮)		
(HCMC・ハノイ)		Quoc Hoa Hotel との調整、支払い		
レンタカー(HCMC)	吉井	レンタカー会社との調整		
		運転手への指示・連絡調整 (訪問先担当者と協働)、		
		請求書のチェック等		
レンタカー	宮澤	レンタカー会社との調整、		
(ハノイ)		運転手への指示・連絡調整 (訪問先担当者と協働)、		
		請求書のチェック等		
会計	武藤	ホーチミン滞在中の昼食等の支払い、プール金管理		
(ホーチミン)				
会計(ハノイ)	山中	訪問先お土産の精算とりまとめ		
		ハノイ滞在中の昼食等の支払い、プール金の管理		
報告書とりまとめ	五藤、渡邊	報告書構成案の作成		
		原稿・写真等とりまとめ、レイアウト		

(3)ホーチミン市師範大学との合同フィールドリサーチグループ分け

	発表タイトル	氏名		
チーム1音楽	ベトナムで日本の音楽がど	Võ Ngọc Phượng Loan		
	れだけ知られているか	Nguyễn Mai Phương		
		Lưu Ngọc Khang		
		五藤咲蓉子		
		山中理奈		
チーム 2 教育	文化教育	Dương Thị Hồng Hiệp		
		Lý Bội Quân		
		Lý Khánh Vương		
		速水友梨乃		
		武藤歩美		
チーム 3 若者文化	SNS	Trịnh Đình Sâm		
		Đào Thị Vy		
		Trần Thị Nhật Linh		
		宮澤ひかる		
		吉井達樹		
チーム 4 食事	ベトナム料理と日本料理の	Thái Bích Tuy ề n		
	比較	Phạm Thị Bích Ngọc		
		Phạm Nghiêm Huyền Phương		
		稲葉歩		
		渡邊奈保		
チーム 5 領土問題	領土問題(対中国)から見た	Võ Phạm Ngọc Châu		
	ベトナムと日本の相異点と共	Lê Hoàng Phương Trinh		
	通点	Lê Thu Trang		
		成毛遥希		
		石川裕菜		

2. シラバス

	ベトナムフィールドスタディ 2015				
開講年度	2015 年度				
開講区分	国際交流センター(英語による国際教育科目)				
学部(学士課程):1年次,2年次,3年次,4年次,5年次,6年大学院(修士課程・博士前期課程):1年次,2年次 受講対象学生 大学院(博士課程・博士後期課程):1年次,2年次,3年次,4年応募者多数の場合は、「国際協力入門」の受講者で参加要件を満生を優先的に選考する					
選択・必修	選択				
拉米利日 克	海外体験実習ベトナム				
授業科目名	Field Study in Vietnam				
単位数	2 単位				
市民開放授業	市民開放授業ではない				
前期集中 事前勉強会(計6回);7月~9月の金曜および月曜 フィールドスタディ実施期間:2015年9月13日(日)~25日(3 日間					
開講場所	事前勉強会:総合研究棟 II 2F 国際交流センター フィールドスタディ:ベトナム国ハノイ市、ホーチミン市他				
担当教員	○国際協力センター長・長縄 真吾(国際交流センター 特任准教授)				

学習の目的と方法

	新興国の一つとして発展著しいベトナムを9月上旬に約2週間訪問し、交流
	校学生との合同フィールドリサーチ・ディスカッション、JICA や NGO 等が
	実施する開発援助プロジェクトの視察学習、ベトナム人家庭へのホームステ
授業の概要	イ、現地日本人駐在員との交流等の活動・学習を行う。7~8月に事前勉強
	会を5回以上実施し、各自が選定したテーマにそってベトナムの開発問題や
	訪問先についての事前学習を行う。プログラムのアレンジも担当教員の指導
	の下、学生自身が行う。

	新興国の一つとして発展著しいベトナムにおいて、ベトナム人学生との合同
	フィールドリサーチ、開発現場視察、日系企業駐在員との交流等の活動を、
学習の目的	学生自身が事前アレンジも含めて主体的に取り組むことにより、グローバル
	人材に求められる3要素を総合的に向上させ、グローバルな視野を持ちなが
	ら主体的・積極的に行動できる人材となることを目指す。
	・日本とは異なる環境におけるフィールドワーク等を通じ、不測の事態等に
	も対応できる能力を高める
	・ベトナム人学生との合同調査・ディスカッションやホームステイ先家族と
	の交流等を通じ、総合的なコミュニケーション能力を高める
	・日系企業訪問、現地で活躍する日本人駐在員等との交流を通じ、自身の将
学習の到達日	来のキャリアや目指すべき人材像を明確化する
学習の到達目	・開発現場の視察等を通じ貧困・環境・平和構築等のグローバルイシューに
標	対して理解を深め、自分自身の意見を持つ
	・プログラムのアレンジ(訪問先との連絡調整、車両・ホテル手配、資料準
	備)等を担当教員の指導のもとで、学生自身が主体的に行うことにより、社
	会人としての基礎的な素養を身につける
	・帰国後参加学生が自身の経験を他の学生や一般市民に伝え、学内や社会の
	国際化に寄与する
	○ 学科・コース等の教育目標
	○ 全学の教育目標
	感じる力
	 ● ○感性
	● ○共感
	● 倫理観
	○モチベーション
ニップロコーチ	• ○主体的学習力
ディプロマ・ポ リシー	• 心身の健康に対する意識
1950	考える力
	● ○幅広い教養
	● 専門知識・技術
	• ○論理的思考力
	● ○課題探求力
	• ○問題解決力
	• 〇批判的思考力
	コミュニケーション力

	● ○情報受発信力				
	● ○討論・対話力				
	● ○指導力・協調性				
	● ○社会人としての態度				
	• ○実践外国語力				
	生きる力				
	● ○感じる力、考える力、コミュニケーション力を総合した力				
授業の方法	講義 演習				
授業の特徴	PBL 能動的要素を加えた授業 グループ学習の要素を加えた授業 キャリア教育の要素を加えた授業				
	事前勉強会におけるプレゼンテーション、事前準備における主体性、協調性、				
成績評価方法	現地フィールドスタディ期間中の振り返り、帰国後の報告書等を総合的に勘				
と基準					
オフィスアワ	国際交流センター 長縄 真吾				
	(月~金 10:00 - 17:30、総合研究棟 II 2 F 国際交流チーム)				
	原則として事前にメール等で連絡のこと				
	・「国際協力入門」を受講済であることが望ましい				
受講要件	・参加費用(12~15 万円程度)を負担できること				
	・事前勉強会にすべて出席可能なこと				
予め履修が望					
ましい科目	・国際協力入門				
発展科目	・Tri-U Joint Seminar & Syposium(Tri-U国際シンポ)				
	5月上旬:掲示板等を通じて応募方法について周知				
	6月3日:事前説明会				
その他	6月10日:応募締切				
	6月下旬:参加者選考・通知				
	7月~9月:事前勉強会				

授業計画

キーワー	ベトナム、ODA、NGO、グローバリゼーション、日系企業の海外展開、貧困、環境、					
ド	紛争と平和、異文化理解					
	1. 事前勉強会(計 20 時間)					
	・ベトナムの概況・歴史					
	・ベトナムに対する日本の ODA の現況					
	・訪問予定のテーマ別に担当を決め、事前学習・発表を行う					
	・現地フィールドリサーチのテーマ設定・事前準備					
	・各訪問先との日程調整・訪問準備					
	・渡航前オリエンテーション、事前準備等					
	・ベトナム語基礎講座					
	2. フィールドスタディ期間中(計 13 日間(正味 5 時間×10 日=50 時間)					
学習内	・ホーチミン市師範大学学生との合同フィールドリサーチ(街頭インタビュー、					
容	発表資料作成、プレゼンテーション)					
	・現地大学生との英語によるディスカッション・交流					
	・JICA・NGO 等が実施する開発援助プロジェクトの現場視察					
	・ベトナム進出企業訪問・現地日本人駐在員との懇親会					
	(毎晩参加者と担当教員による振り返りミーティングを行い、各自の気づきを共					
	有する)					
	3. 帰国後					
	・報告書作成					
	・報告会の実施					

3. 終了後の参加者アンケート集計

【回答者】10名

1.	プログラム全体の満足度
	期待を大きく上回る内容で非常に満足した 【8名】
	おおむね期待通りの内容で満足した 【2名】
	どちらともいえない
	期待したほどではなく、やや不満が残った
	期待を下回る内容で非常に不満が残った
(主な理	里由)
・多くの	方との出会いが刺激になった(4名)
将来の	キャリアを考えなおすきっかけになった (3名)
視野や	考え方が広がった(3名)
自分の	専門外の分野に興味が持てた(2名)等

2. 自身の目標達成度

- □ 当初想定以上に達成できた 【1名】
- □ ある程度達成できた【7名】
- □ どちらともいえない【1名】
- □ あまり達成できなかった【1名】
- □ 全く達成できなかった
- 3. 最も影響を受けた、または印象に残ったプログラム名(18 か所の訪問先等から 3 つ選択)
 - · 都市鉄道(4名)
 - ·駐在員懇親会(4名)
 - ・フィールドリサーチ (3名)
 - ・KAIZEN 吉田スクール(3 名)
 - ・ストリートチルドレン (2名)
 - ・ハノイ農大(2名)
 - ・ツーヅー病院(2名)
 - ・女性開発センター有松隊員(2名)
 - ・その他8プログラム(各1名)

4. シラバス上の学習の到達目標についての自己評価

(5:能力・意識が非常に高まった、4:能力・意識がある程度高まった、3:どちらともいえない、2:あまり高まっていない、1:まったく高まっていない)

項目	5	4	3	2	1
(1) 異なる環境での対応能力	6名	2名	1名	1名	
(2) 語学力・コミュニケーション能力	5名	5名			
(3) 将来のキャリア形成	7名	3名			
(4) グローバルイシュー (ベトナムの開	4名	5名	1名		
発課題を含む)への理解					
(5) 社会人としての基礎的な素養(訪問	3名	4名	3名		
先との調整、ロジ業務)					

5. グローバル人材に向けた能力・意識の向上についての自己評価

(5:能力・意識が非常に高まった、4:能力・意識がある程度高まった、3:どちらともいえない、2:あまり高まっていない、1:まったく高まっていない)

項目	5	4	3	2	1
(1) 語学力・コミュニケーション能力	-	-	-	-	-
(2) 主体性・積極性、チャレンジ精神	5名	3名	1名	1名	
(3) 協調性・柔軟性	7名		3名		
(4) 責任感・使命感	3名	5名	1名	1名	
(5) 異文化に対する理解	7名		3名		
(6) 日本人としてのアイデンティティー	4名	6名			

注:上記6項目は日本政府の「グローバル人材育成推進会議」中間まとめの項目を元に作成